愛國婦人

創刊明治廿五年三月廿七日●明治卅五年三月廿七日第三種郵便物認可●毎月二回(五日廿日)發行●電話番町千七百四十五番●同五百廿番●遞送無料●振替貯金口座壹壹參八壹番

●定價一部金三錢五厘●半年分金四十二錢●一年分金八十四錢●廣告料一行金六十錢●發行所東京市麴町區牛ヶ淵公園內愛國婦人發行所●發行兼印刷人山澤俊夫●編輯者永持德一

Jan. 1st. 1910.　明治四十三年一月壹日發行

吾國の物語の社會に及ぼす力

伯爵 大隈重信

神話傳說が、神聖なる歷史の最初の歷史でありし事は、何れの邦家も同樣である。埃及、印度、希臘、支那、日本等の古き國は建國時代は必ず神話傳說によつて、既往の事蹟を傳へたのである。吾日本の如き王仁來朝以前の語部と云ふ役目ありて、子々孫々其職を踏襲して、萬古の神話傳說を、祖先以來語り傳へたのである。語部の職は、鎌倉時代頃迄ありしやう思はる。源氏物語、竹取物語、平治物語、平家物語の類は、語部の口で云ふ處を筆を以て書き連ねたのである。文學上から云へば物語立派なものではあれど、物語りの役目を代表せしものである。神皇正統記とか、太平記とか、太閤記、德川十五代記とか、說教、講談、落語、義太夫等によりて、今に物語りつゝある事は昔しの片影とも見るべく。或は發展したものと云ふて可なりだ。

演舌と云ふ事は、希臘の古聖賢時代既にありし事なれど。吾が國の物語りの如くに興味を與へ感動せしむるやうな事はなく、形式に流れ、嚴格に流れ、朗讀に傾く癖がある希臘プラトー以來論理學が發見せられて、大雄辯家も多くは西洋に於いて輩出せしも、其發達は昔しも今も同じ狀況であると云ふに過ぎない。殊に吾が國に入り來りしは、明治以來の事故、其星霜僅かに三四十年、大雄辯家と稱するもの幾人かある。吾が邦に於ては、演舌は多く政治上に用ひられ、教育家、宗教家、文學家も用ひらるゝも覇氣を有し威嚴に富み、深刻なるもの、識見豐富なるもの、炯眼達識なるもの等を綜合する圓滿なる雄辯家が何人であらうか。長廣舌を弄し、美音に富むものはあれど、衷心以て其の雄辯に醇化せしむる、力あるものは少なし。從つて廣く行なはれざるなり、反之日本の津々浦々に到る迄物語なるもの、即ち活人形、演劇、踊、講談、義太夫、落語、浪花節、左衞門語、說教類が如何に流布するかを見よ、豐年なりと云へば、村芝居を企て、若い者達が役者となり、講談師ともなり、踊子となり活人形となり、義太夫語りとなり、落語師となり、左衞門語ともなり、說教も試み古き聖賢等の義に勇む事蹟に賞贊を捧げ、懲惡勸善の聖人の道を慕ふのである。歐米人は日本の露國に勝しは、學校教育に原因すと驚嘆なし居れるも、露國に勝ちし、最大因は祖先傳來の物語りを好む習慣、即ち社會教育の薰化が一天萬乘の大君の爲めに死を恐れしめざるによつたのである。此の平民的普遍的教育の力は、過渡文明の今日に益し其勢力を發揮し來り、新聞紙の如きは爭ふて四十七士傳とか德川十五代記とかを、講談師の話せし儘掲載せざれば、讀者を得るに由なく、致命傷を得る事を自認し居れるを見ても明かなり、小說が德川時代より發達し來りしとは云ひ乍ら、武士、仲間とか文字あるものの間に、尊敬せられ來りしを以て、明治の今日となるも如何に、歐風を加へたる高襟者流も、義理で固めた、忠孝の教へを含むもの少なき故を以て講談師を新聞紙上より驅逐する力なきは、其力の不足を明かにすと云ふものである。

謹賀新年

專賣特許 一森式座椅子

一箇にして安樂椅子となり又寢臺となり疊込めば縮少して携帶に便なり

圖面入說明書箱と御覽の上御使用被下度說明書は御申込次第進呈可仕候

尚本品は高尚優美にして年始の御進物用として至極適當なり

定價
壹臺 金五圓以上 一更紗布團付
壹臺 金六圓五拾錢以上 一メリンス布團付
壹臺 金七圓五拾錢以上

製造發賣元 樂民堂
東京市芝區下高輪町廿一番地 電話芝一〇九五番 振替貯金口座一八七六七

特約店 販賣店

東京 大阪 三越吳服店
鈴木店 東京市京橋區銀座四丁目十三番地 電話新橋六五六番 岐阜提灯毛織物
神谷店 東京市京橋區銀座四丁目十一番地 電話新橋一五六一番 岐阜提灯毛織物
第二博品館二階 東京市下谷區上野廣小路 電話下谷五三六番三〇四四番
南江堂小立商店 東京市本鄕區元富士町二番地 電話下谷五五七番
杉野洋服店 橫濱市住吉町五丁目六拾八番地 電話一〇七二番
杉山椅子店 靜岡市札ノ辻町十八番地
丸山吳服店 臺灣臺北府前街三丁目 電話二九五番
手塚商店 門司市東本町一丁目
たまや商店 大分縣別府松原通
野崎洋物店 青森市大町三丁目
發明品陳列會 東京下谷區上野廣小路 第一
吉田商店 堺市市ノ町東一丁目

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

時世の遷り行くに伴れて

侯爵夫人　鍋島榮子

婦人集會の今昔

時世の變り行くにつれて、種々と振合の違ふことばかり出來て參へることで御座います。

唯今でこそ婦人の會合は、世の中に無ければならないものゝやうになりましたものゝ、私が三十年前海外に居りました頃には海外にも餘り婦人の會合と云ふものは無かつたやうに覺えて居ります。獨り、婦人の集會ばかりではなく、慈善會とか慈善事業とか云ふやうな、慈善とか、博愛とか申すやうな趣意での働きをする團體は海外でも餘り開かなかつたので御座いました。

今日繁々我が國に開かれ、催されます那の慈善演藝會のやうな性質のものが、時偶彼地で催されぬのでは御座いませんでしたが、我國で致すやうに態々藝人を雇ひ入れて催しをすることは、彼地では決して御座いません。海外で此の種類な演藝會の御座います時には、ピアノの上手な方はピアノを、ヴアイオリンの上手な人はヴアイオリンをと云ふやうに、貴婦人と云はれる人が自身で、斯う云ふ種類の會合には演奏することになつて居りまして、殊更、藝人を頼むやうなことは決して無いので御座います。

我國でも追々と、ピアノやヴアイオリンの上手な若い貴婦人が世に出て參りますから、漸次と彼國のやうに、藝人なぞを傭ひ入れないで、慈善演藝會なぞの催さるゝ時節も參らうと思つて居ります。

内に厚く外に薄し

婦人の集會であれば、その幹部で事務をする人を皆な婦人にして終ふことも、惡いことでは無からうと思ひます。けれども、婦人であれば、自然家事向きの用事なぞも多く、男子方のやうに、一圖に其事にばかり身を入れ、心を籠めることが、充分に參りかねは致まいかと、それだけを私は懸念して居ります。

私なぞも、唯今は各種の婦人會に關係致して居りますが、外に勉めれば、内のことは自然怠りがちになりますから、思ひながらも、何の會にも充分なことを致すことの出來ませんのが殘念で御座いますが、致し方は御座いません。

それに時世の違つた今日で御座いますから、往昔と違つて、自分で子供の世話をして遣らなければなりませんから、子供は多し旁々、家内のことだけでも仲々用事は多いので御座います。

或る御婦人はお家のことは一向お構ひなく、外のことばかり爲さつて居られるやうで御座いますが、私は到底、左樣なことは出來ないので御座います。そのやうに家のことや、子供の事を捨て放しに致して置きますと、時世の變つた今日、子供が何のやうな學友と交はつて居りますかなぞと云ふことも、人まかせでは、不知仲々解りやうが御座いませんから、自分で世話もし、心配も致すと云ふやうになるので御座います。ですから、自然内に厚く、外のことに充分心を注ぐことが出來ないので御座いますが、前にも申したやうに、これは致し方も無いので御座います。

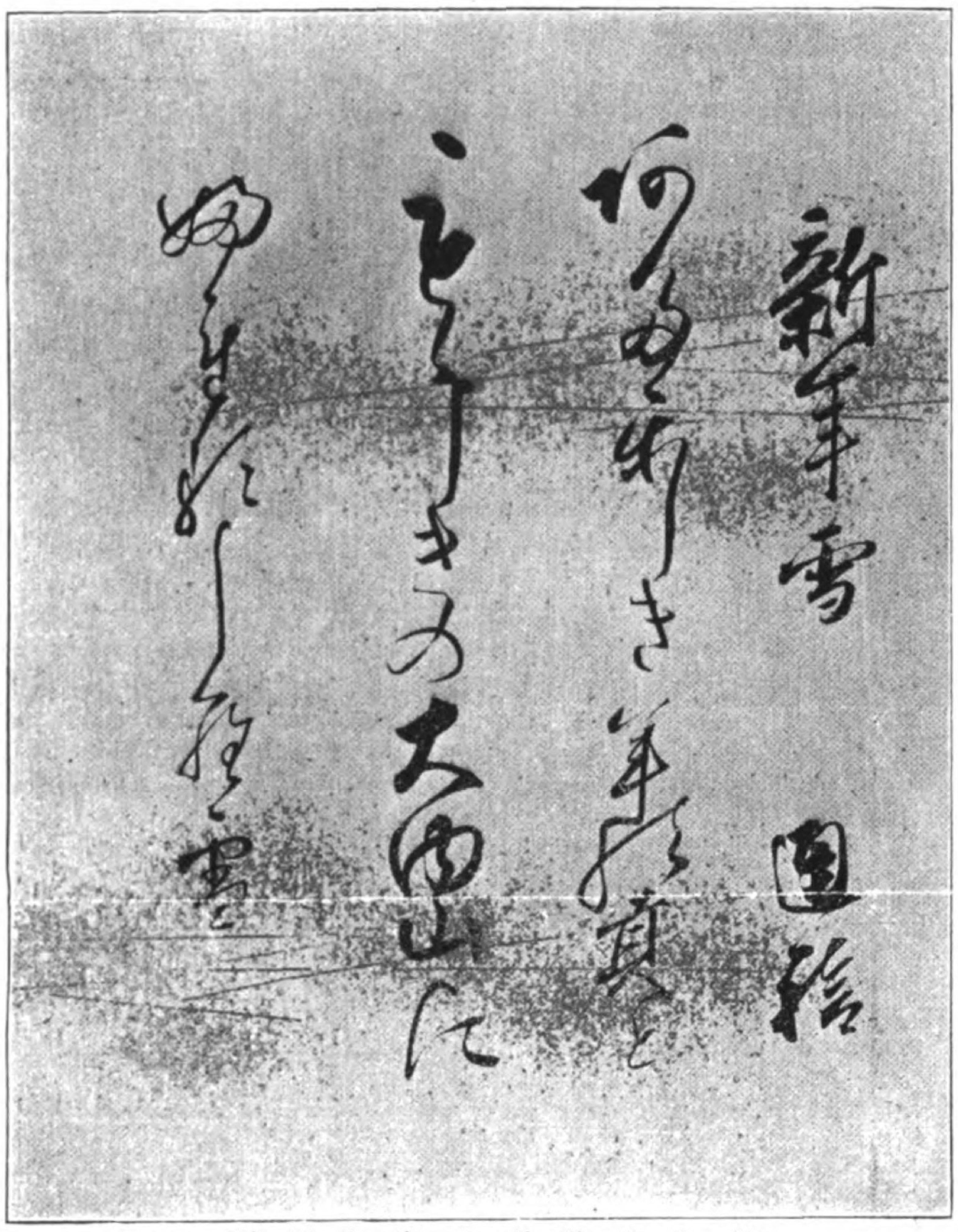
日本・支那・瑞西の旅館

時世の變り行くにつれて、旅宿なぞも種々便利なのが出來ましたが、何うも未だ海外のに比べると不充分で御座います。瑞西のやうな旅客の多く集る處の旅宿で御座いますと、隨分便利に出來て居る旅宿が幾何も御座いまして、食事の準備なぞも、瞬時に出來るやうになつて居るのも御座います。それに、我國では那の箱根でも、風景の宜しい處のは破風屋位なもので御座いますが、彼家も未だ〳〵設備が充分に好いとは申されませんし、設備が充分行き届いて居る譯に參りませんのは如何にも殘念に思ひます。

それに瑞西なぞになりますと、何う云ふ人でも思ふやうに風景を樂しめるやうに、大小樣々な設備の行き届いた貸別莊と云ふやうなものがあるので御座いますが、我國には未だ、斯う充分に設備の行き届いた貸別莊やうのものは無いやうに思ひます。

其處へ參りますと、流石に支那で御座います。

私が支那へ參りましたのは、昨年唯の一度で御座いますが、我國とは違ひまして、旅館のやうなものでも、設備の能く行き届いたのが御座いまして、誠に居心も宜しく思ひましたので御座いました。



東久世伯爵の新年の書

學問氣有階級と學問氣無き階級

法學博士　高田早苗

先頃のことであるが、實業家銀行家の會合があり、その砌、私も案内を受けて晩餐會の席に列したのである。その席には、文部次官を初め諸學校長も多數列席して居つた。その席上、會長澁澤男爵は談話に便宜を與へる爲め、三個ばかり問題を出して、それに對する教育當局者の意見を求められた。その三問題のうちに今日の子弟は往昔の子弟よりも概して學問を致たがるやうに思ふが如何、と云ふやうな意味のがあつた。當時、他の二問題と共に、その席上で私の意見のある處を一通りは述べて置いたが、此處には此一問に就いて私の感想を述べやうと思ふのである。

學問する人悉く學者にあらず

今日、世に時めいて居る實業家と云はるゝ人のうちには、學問と云ふものは全然無いが、金儲けに至つては誠に巧みな人が無いでは無い。また、斯う云ふ人のうちには、學問は金儲けをするのに妨げとなるかのやうに思つて居る人も無いでは無からうかと思ふ。けれども、私の見る處を以てすれば、斯う云ふ人々は、學問をする人の全部が學者に成り終ふせるやうに誤解して居るのでは無からうかと思ふ。學問をする人の全部が悉く學者に成つて終ふのであれば、それこそ學問を子弟にさせるのは少し考へものかも知れぬ、が、今日の子弟が概して學問を致たがると云ふのは、決して其の全部が學者になりたいとの希望を有して居るのでは無いと私は信ずる。

されば、學問を致たがる子弟には飽くまで學問をさせる方が宜い。苟も學問を子弟にさせる以上、資力が夫れに伴ふ以上、子弟に最高等に至るまでの學問をさせるが宜しいと私は思ふ。

學問に馳せ過る世なし

苟くも大學と云ふ名稱の附けてある學校は、男女の學校の孰れを問はず、何處も入學者が多いやうである。これと云ふのも、今日の子弟たる人等は、學問をする以上、究極の學校で最高等までの學問を爲し終るまでは、飽まで休まじと云ふ魂を保つて學問を致初めるからではあるまいか。果して然らば、子弟の其の初一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

念を貫かせるのは、他に餘儀なき事情無き以上、これ父兄たる人々の責任ではあるまいか。

私の斯く申すは、如何に世の子弟に、學問を致たがる人が殖えて來ると致た處で、我國社會の全部を擧げて學問に馳ると云ふことは斷じて無きことを確信して居るからである。

私は斯う信じて居る。學問を爲たがる子弟は、依然、學問氣ある階級の裡から出る。青年男女子弟の多くが如何に學問に馳ればとて、我國社會の全體を擧げて學問氣ある階級にして終ふことは決して無い。學問氣ある階級と共に學問氣のなき階級は、如何に世の中が文明に進み、如何に學問流行の世の中になつても、兩々相並んで存在する。であるから、我國社會の全體を擧げて學問に馳せ過ぎると云ふやうな愁ひは決して無い。加之、學問氣のある階級にある子弟の全部が悉く學問をすることが出來る理のものでは無い。左樣いふ筈は斷じて無い。

資力なしに學問は出來ぬ

それは如何と云ふに、等しく學問氣ある階級の裡に於ても、學問をさせ得るだけの資力が夫れに伴ふものと、資力の伴はぬものとがある。資力なしに學問は決して出來るもので無い。されば、學問氣ある階級に在る子弟でも、資力――學資の無きが爲めに、餘儀なく學問の門に入らずして、直に實地の業務に入るものが多數ある。私も現に夫れを實例で知つて居るのである。

之れに依つて見ても、如何に學問流行の世の中になつても、社會全體を擧げて學問に馳せ過ぎると云ふ時代は來らぬことゝ信ずる。であるから、學問を致たがる子弟には男女を問はずして、飽くまで究極まで學問をさせるが好いと私は信じまた世の人にもお勸めする。

それと同時に、今一つ世の誤解を解いて置きたいことがある。

學者は數よりも粒

それは他のことでは無い。世の人々の多數のうちには、學問を致たものが直ちに學者である、大學校を卒業すれば最早學者になつたやうに思ふ人がある。が、これは大なる誤解である。

成る程、大學校を卒業すれば、當人の性質と心がけ次第で學者にならうとすればなれぬことは無い。けれども、大學校を卒業したと云ふのは、單に身に學問と云ふ有利なる武器を備へた人になつたと云ふまでのことであつて、大學校の卒業生が悉く學者では無いのである。加之、世の中に、學問と云ふ武器を備へた學問氣ある階級に屬すべき人は多數に必要であるが、學者と云ふものは限られた數に於て必要であるばかりで、左樣多數に必要は無い。のみならず、學者は數よりも粒で無ければならぬ。多數の學者は要せぬが、少數の粒の好い學者は飽までも必要である。

學問を具へた人は社會の長

要するに學問氣ある階級は何處までも世の中に必要である。が、それと同時に如何なる時代に於ても學問氣の無き階級も、それと相並んで存在する必要は、學問氣ある階級の必要以上である。何故となれば、學問氣ある階級より出でゝ學問を身に具へた人は、概して一部の社會に長たるべきものであつて、一部に長たる人と共に、この人に依て御せらるべき階級が世の中になければ、一部に長たるべき人の必要も自然に無いと云ふ結果に終るからである。

新年・新活動

北海道長官　河島醇

五千萬の同胞を有する大日本帝國の臣民、歐米列强と肩を比する强國の民が、狹隘なる土地に蟄居するは、美德なり、美風なり。孝經の敎へによるなりと云へり。是れ完く祖先が意志を忖度せず、祖先が事業を追慕せずして、只墓を守るのみを以て孝とする優柔不斷なる親の脛を齧りたき意氣地なしの言のみ。吾々の祖先は人類學者の說によれば、漂流の民とも云ふにはあらざるか。よし漂流の民にあらずとするも、東奔西走南船北遊弓矢を以て吾が中國を靖らめし偉業の下に、帝國を建設せられし事を思ひ見よ。小つぽけな一小天一町區に生を得て、祖先の威靈に對するを得るや。只生存競爭の烈しき戰ひに倦み疲れ、得る處少なく費やす處多きにあらずや。口には國利國權を佐從すべしと唱へて十年前の資産は次第

次第に衰滅し、殘り少なになりつゝ、あるにあらずや。況んや毎年々々の人口は全國に於いて五六十萬人を增進するを以て一層得る處少なきや明かなり。東に米土、南に濠洲、西に清羅等諸國を控へ、北には近接したる朝鮮西比利亞を有す。

移住して遺利を東國に輸するを得るは決して至難の業にはあらざるなり。況んや帝國國是の一方針としては、移民なるものは必ずや存在すべきものなるに於いてをや。決して他國に移住するは家の耻にもあらず。村の耻にもあらず。一國の利益名譽とを高めるものなるをや。婦女諸君よ親不孝なる語は墓を守らざるものにあらずして、兩親兄弟をして苦艱と戰はしむるものを云ふなり。移住して得たる金錢を送りて父母の自由に委せよ。決して不孝の兒にあらざるなり。

臺灣滿洲、樺太、北海道は內國の範圍なるをも悟り得ず、遠き外國に行くが如き考へを有するは、實に愚かなる話なり。韓國も內地同然なり。世人は斯くの如き明白なる地理的觀察眼をも了解せずして外國同樣に思ひ居る樣にては、帝國の發展は期し得られざるなり。彼の伊太利人を見よ。彼れは母國を去りて外國に移住し、米國加州の如きは彼れの手によりて開發せられ、毎年母國に多大の金錢を送りて、伊太利政府の財政の基礎をして强固ならしめし最大物と尊重せられ居るにあらずや。青年諸君が世界到處は帝國の利權伴隨すと信ずべきものにして、支那人が世界の各處に永住的美風を有するが如く、勇往邁進して蠻烟瘴雨と戰ふべきなり。北海道の如きは蠻烟瘴雨と云ふが如き處なく、完く內地同樣に開發せられ移住者には一口十町歩を無料に給する外猶便宜を付與せり。人口多き處より稀薄な處に分配せらるゝは、自然の數なり。水の如き空氣の如きものを見よ。一點の赤は永く一所に止まるべくもあらず。黑烟の濛々たるも何時とはなしに清澄なるものとなるにあらずや。決して長く一所に永住するを許さず。祖先墳墓を守るべきものとせば他國に移住して得たる利益にて守るべきのみ。全土擧げて移住せよとの言にあらず。只良風美俗と云ふ古風な質樸な町村の人々に切望して可成諸君をして他國に働からしめ、殊に人口稀薄なる米國の如き北海道の如き遺利多き地に送る事を名譽なりとする事を一般の習性一般の良風とせられたき事なり。北海道は今後十年十五年の後には、未開地の所分一段落を告ぐる事となるべく、如何に此の時移住するも一口十町歩を無料に給與せらるゝ事なかるべし。希くば諸君勇往なる氣風は祖先の靈に耻ぢざるもの即ち價値ある努力と奮勵すべきなり。殊に婦女子の移住も必要なれば若き夫婦の出稼きは一層勤儉貯蓄を得るや明かなり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

改めた女性の風習

學習院教授 寺田勇吉

◎女子の袴は終日着くべし　邦人の不經濟なる生活狀態を改むる一方便として予は餘程前より女服の改良を企て、居るが、殘念ながら未だ宿望の一部分しか實行されない。近年女學生が一般に袴を着くるやうになつたのは、確かに女服改良の一端たることを疑はぬけれど、今日では學校へ行く時ばかり穿いて、家へ歸へると脱いで了ふから活潑な運動が出來ない。袴も學校限りのものなら効益が尠ないものだ。女學生は學校に行かうが、買物に行かうが、散歩に行かうが、何家へ行つても終日必ず袴を着けて居るやうにしたい。又袴地は舶來の高價なる毛織物などを用ふるに及ばぬ。木綿でも構はぬから、可成國產の材料を用ひて作る方が得策ならんと考へる。

◎無精なる淑女紳士の陋習　西洋人に較ぶると日本人は概して餘程無精である。現に予が知れる或る華族の令孃などは、夜分寢る時に、オイ寢るよといへば、女中が二三人飛んで來て、まづ羽織を取る。足袋を脱がせる。寢卷を着せる。それから寢ると蒲團を掛ける。毛布を掛ける。夏は夏、冬は冬で、中々の騷動である。而して朝起る時には復びこの騷動を繰返へすのだ。かく無精では、人間は決して壯健になれるものでない。華族樣などには、馬車に乘りながら侍女に傘を翳させ、甚だしきは便所に行つて手を洗ふ時、男の癖に女に水を掛けて貰ふ人すらあるさうだ。此等は全く封建制度の遺習と思はれる。西洋ではやむごとなき皇族方でも、自身で買物をなされ貼錢まで自ら受取らるゝさうだ。日本人とは大變に異ふ所がある。

◎誤解されたる美人觀　我邦の男子は、どうも顏色の蒼白い痩せた婦人を好む風があり、又婦人の方でも、可成面色が黑くならず、肌體の肥らぬやうに力める。其結果終に働くことを厭ふたり、日光に照されぬやうな工夫をする。この誤まりたる男性の美人觀は速かに革めなければならぬ。西洋とても男子が顏色の黑い女を好むといふ譯ではないけれど、顏色の蒼白いものは非常に嫌はれるので、十分身體の營養に注意するから、一般に體格剛健にして腕力も中々強いのである。先年予が泊つて居た伯林の下宿屋の主婦が、歸朝する時告別の禮に手を握つたが、力が強くて涙が出るほど痛かつたことは今でも記憶して居る位である。

函館公園の新年の景

◎悲しむべき内外人の體格の差　邦人の體格は、男女共歐米人と較ぶると餘程惡い。婦人の身體が分けても弱いやうである。平均上、歐洲の男子の身長は我邦の男子よりも三寸高く、體量は二貫三百目ばかり重い。また日本婦人の方は、體量に於て二貫六百目ばかり輕く、身長に於ては六七寸ほど低い上に、總ての肢體の構造が虛弱である。故に戰後國力養成の第一義として今や大に體格の改良を圖らなければならぬと思ふ。いかに父だけ強くとも、母が弱ければ、兒孫の體格が決して強壯に出來る筈がない。

◎西洋の母親の有する威權　我邦にては、兒童の怖がるものは、俗に地震、雷、火事、親父といふて居るが、歐羅巴では之と反對で母親である。兒童が一番畏服し居るものは母親である。日本では、兒童があばれると、妖怪が出るとか、巡査さんが來るとかいつて制止するけれども、巡査さんは決して懼るべきものでない。又妖怪といふものは、何物だか解らない。故に西洋では、兒童に對してそんな懲戒を施さぬのである。母親が智識に富み腕力も強いから、母親の叱責を蒙むるのが、兒童に取りては何より怖いのだ。主婦がその位な權力を持つて居るから、家政の管理が十分行屆いて手落がないのである。

◎女子に必要なる意志の練磨　我が中流以上の家庭に於ては、今尚ほ壓制主義を執る家が多い。己は勝手に外出して何時歸るか解らぬといふやうな所業を敢てするも、妻の方は、一寸散歩するにも、洗湯に行くにも、買物に行くにも、甚だしきは菓子を喫ふにすらも、一々良人の許諾を得なければならぬといふ風だ。時によると、女子は全然男子の玩弄物ではないかと思はるゝ程無神經である。困つたものではないか、柔順は美德であるけれども、あまり柔順々々といつて勸めると、柔順が一變して終に卑屈怯懦となつて了ふ。故にかゝる弊風を除くには、女子をして十分意志を練磨せしめ、明かに物の利害曲直を鑑別し得て、その本分を自覺せしむることが肝要である。

◎臺所の整理と經濟　今日中流以上の家庭に於て隨分不整不潔なる臺所を見るのは、重要なる厨房を無教育なる下婢に托して、主婦が之の管理に注意せぬためなるべく、臺所に蛆蟲が這つて居たり、蚯蚓が蟠まつて居たり、鼠族が之を棲所として居るのは、非衛生といふよりは寧ろ危險である。それが如何なる災害の原因となるかも知れぬを解せぬとは不見識も甚だしいではないか。厨房の經濟は家政の要樞を占むるもので、例へば飯を炊くにせよ、注意深き細君なれば、薪が五本で足るのを、不行屆なる下婢に托すると、煙ばかり出して家屋を黑くする上に薪を八本も焚くのである。それも五日や十日の事なら何でもないが、一年二年と積れば少なからぬ金額となるのだ。然るに舊慣上主婦がかゝる點に無頓着なるを以て尊いとして居る、

◎一日十二里の勞働に服する下婢　この調査は統計を取つた譯ではないけれども、兎に角實驗家の說である。それは外ではない、東京に於て通常の忙がしい家へ勤める下婢は、一日何程の業務を執るかといへば、先づ七里位歩くだけの勞働に服し、其位の旅行なれば苦もなく出來るさうだ、又來客の多き飲食店、牛肉店、料理屋等に勤めて居る女中等が、種々雜多な用事にて、拂曉より深更に至るまで二階へ昇降する里數は約十二里位に達するさうである。されば彼等の體格は一般に強健にして、所謂貴婦人とか令孃とかいふ人々には、迚も堪へ切れぬほどの勞務にも堪へて能く働くさうだ。何は兎に角東洋新勝國の婦人には今少し立派な肢體を持たせたいものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

姑の無い家庭

夕波子

△幼い昔聞いたお說敎

私は幼い頃、よく祖母に連れられてお寺參りをしました。その時分聞いたお說敎の中で、今でも私の記憶を去らぬものに次の樣な話がありました。

「此の中にゐる御婦人に一人として人殺しをしてゐないものはありませんぞ。假令手づから刀を持つて殺さないでも、その心の中で人殺しをしない者はありますまい、自分の心に聞いて御覽。

第一に姑を殺さうとしてゐる。

年頃になつて嫁入話が始まると、その娘の親御さん達からして、肝腎のお婿さんの話よりも先方の姑さんの年を聞いて、もう六十とか七十とかの年寄だと、後暫くの辛抱だと云つて喜んでゐる。――そして何ぞと云へば、こんな六ケ敷姑が早く病氣にでもなつて死んで終ふたなら跡はどんなに　氣樂だらう、と片時忘れず祈つてゐる。――手に刄を下さずとも、心で思ふそれだけが立派な人殺しでありますぞ――」

子供心に、私はこの話を如何に恐ろしく聞いたでせう、心に思ふ人殺し、當時私は人さへ見れば、あの人もさうぢや無いか、此の人もさうか知らんと、妙な疑ひが始終小さな胸を去らないのでした。

△新世帯に火鉢の灰の心配まで

子供の時分に感じた事は何時までも忘れぬもので、私は其頃から、嫁として姑を煙たがる位恐ろしい罪惡はない樣に染々思つたのでした。そしておぼろ氣ながら。「私は大きくなつてお嫁入しても、姑を憎むやうな恐ろしい嫁には決してなるまい、仲よくして孝行しませう。」

と、そんな風な事を考てたのでした。けれども幸か不幸か、緣あつて嫁いだ夫には父もない母もない、小姑一人も無いと云ふ寂しい一人ボッチなのです。其夫と、私は故鄕遠い都の空に二人ばかりの家庭を作らねばならぬ身となりました。

子供の時分に染み込んだ說敎のそればかりでなく、私は幼い頃實母に別れて、温かい慈母の情を知らぬのが染々と寂しかつたので、せめては嫁して後優しい姑を眞の母として仕へ度いのが心からの望みでありました。ですのに、夫にも矢張り母がない、私は一生を母知らずに過さねばならぬのです。

尤も、世帯とは云ひながら、二人に相應しいホンの小やかなものではありました。三度の食事を盛るに足るお箸と茶椀さへあれば事足りる位なものでしたけれど、それでも實際に立てば、さう話のやうに手輕くは參りませぬ。漸つと十七の秋を、田舍から出たばかりの身で、火鉢の灰の心配までして歩かねばならぬのには實際どれから手をつけて可いやら、心細も途方に暮れるばかりでありました。

△長襦袢一枚無駄に潰す

買物や仕事の遣り繰りなぞ、その頃の自分では心を使つた積りのものでも、今から考へると隨分馬鹿げた無駄な事が少くありませぬ。一例を擧げると、私の祖母が古くから藏つてあつた小切れなぞを繼ぎ合せて、丁寧に拵へて呉れた長襦袢が一枚ありました。それをたしか平常着の襦袢に不自由したかどうかである時取り出して、折角繼いだ物をばら〳〵に解したものです。そして三枚だか四枚だかに碌でもない袖や蹴出しなぞ作つて、その時の自分では經濟の積りで居たのですけれど、さうして拵へた三枚は決して三枚の役に立つものでは御座いません。今では影も形も失くなつて、時々役にも立たぬ切れ端など見出した時にはいつも馬鹿な事をしたものだと思ひ出すのです。

こんな事でも若し姑がゐましたなら。

「平生のには木綿の切れを買ふにしても それはそのまゝで取つて置きない」

と乾度止めて呉れたに違ひありません。些細な樣ですが、些細な事が世帯を持つ上には何より大事なのです。三年越の今日此頃はよ程慣れても來たのですが、考へて見ると私にはかうした事實が澤山ありました。

△取り締りのないだるい空氣

廣い世の中に一生の苦樂を共にするは夫より他に一人もありませぬ。ですから夫さへ確としてゐて呉れゝばいゝやうなものですが、併し又、女は矢張り女同志でなくては打ち明けられぬ悲しい事、辛い事、切ない事の數々があります。何が辛い、何が不足と云ふではないが「あゝお姑さんでもゐて下すつたら」と、そつと人知れず泣いた事も幾度かありました。

表面ばかり見る世間の人達は、かうした夫婦暮しを氣樂だと云つて羨やむのです。私もよく近處の人達から、

「お氣樂でよござんす」と云はれてゐる。それは姑や小姑の數多くに氣兼氣苦勞をしてゐる人と、そんな苦勞の無いのとでは無方が如何にも氣樂でせう。併しさうした氣樂は果して人間の幸福でせうか。

世間で云ふ二人暮しの氣樂なのは、朝寢、晝寢、宵寢、間食の我まゝを盡さうとも誰咎めぬのを云ふらしいのです。けれどもそれは決して家庭の幸福ではありますまひ。仕度いまゝの我まゝに遊び暮した一日の終、身體の皮膚のだるくたるんだ時程不愉快なものはありませぬ。若しその不愉快に慣れて一日が一月と延び、一月が一年となり、やがて十年二十年、永劫を期すべき家庭の取り締りのないゆるんだ空氣の滿ちたならば、一番お終ひにどうなるでせう。

私には押へ手がない、隙に附け入る何かゞふと心の底で「思ひ切つて朝寢をして見やうか」「仕度いまゝに遊んで見せうか」と淺ましくも思ふ事はありました。けれどもその終りは何時も不愉快なのです。不愉快なのに忍びぬ爲め私は何時もそんな時に、自ら戒して不知其弊に落ちなかつたのを僅かに誇りとします。

△家庭には是非姑が必要

私がよく姑があれば好いと云ふと、「無いからさう思ふのですよ、あつて御覽なさい、それは厭になりますよ」と誰も皆さう云ひます。併し、厭になり好きになるのはそれは別問題として、實際、姑は家庭の爲に無てはならぬ者だと思ひます。

世がどんなに進まうとも、娘時代には娘時代の道があつて、學校や書物で及ばぬ所を母が迷はぬやうに導いて呉れると同じく、嫁しては矢張り書物ばかりで學び盡さぬ妻の道があるでせうと思ひます。それを迷はぬやうに渡るには、久しい年月の經驗を積んだ姑の智識に學ぶ外はありますまい。新舊の思想がどうのかうのとよくそんな衝突は聞きますけれど、いかに新らしい思想の人でも、古い習慣を全然破つて大晦日に雜煮を祝ひ、元日に煤掃ひをする事は出來ますまい。矢張り人並みに正月は正月らしく醉ひ度いのが人情だとすれば、新らしく進むにつれて古いものも伴はねばなりませぬ。分けて家庭を整理する上には古いものが最も大切かと思ひます。

私は自分が乏しい智識から、過去三年の愚かな經驗に照して、姑のない家庭は決して世間の云ふやうに幸福で無いのを斷言致します。

謹みて新年を祝し
尙一層の御愛顧を
祈る
一月一日
永持德一
（森 志づ ご）
自宅　本鄕區元町一丁目十八番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

私の一日

早起と私の運動法

跡見花溪

私は毎朝必ず五時には起きます。さうして如何に寒い朝でも冷水摩擦をして、それから何處と云ふことなしに、一時間程外を散歩致すことに定めて居ります。若し又雨でも降つて居りますれば傘をさして參りますし、如何な日でも必ず一時間位の散歩を致しますのを、日課のやうに致して居ります、かつこれが私の運動法で御座います。それですから私は外には別にこれと申して運動は致しませぬ。

朝早く起きますれば、身體のためにもよく、また其日一日は寔に愉快で御座います、寒くなりますと、早く起きますのは隨分辛いことでありますが、併し慣ればまたそんなに辛いことではありませぬ。只今五時と申しますと、まだ明けきつては居りませぬ、それから冷水をして、散歩から歸つて參りまして、朝の食事を致します、食事と申しましても、私は晝と晩と二飯しか戴きませぬから、朝は玉子を一つたべます、それで朝食は濟せます、朝早く起きまして、新鮮な空氣や、朝風にあたるのは寔に心持のよいもので御座います。

私に嫌ひは何にもない

また八時には教場に出なければなりませぬ、自分の受持も御座いますし、また各教室を見廻たり、午後の二時までは教場に出て居ります。それから依頼されましたものを書くのですが、さう云ふ風でなか／＼用が御座います。

私は一體多趣味の方とでも申すのでせうか、こういふことが嫌ひだと云ふものが御座いませぬ。まあ此頃は上野に繪畫の展覽會等がありますから、參考にもなりまするし、また好きで御座いますから、幾度となく見に行きます、人の苦心をして些細な所にまで力を入れてあるのや、その外いろ／＼なよいものが澤山ありまして、さういふものを見ますのは何よりの娯みで御座います。

生花も好きですが、また茶は子供の時分から致して居りますから大好きで御座います。私は生徒にも皆茶に花に琴と云ふやうなものは、これは隨意科に致してやらせて居ります、こう云ふことは一通り覺えてをいて決して惡い事ではないから、無理には進めませぬが、餘暇にやつてをくもよいと思ひます。西洋の音樂はまだ自分が眞實によく存じませぬから、それで、どうも音樂は日本の音樂の方がよいと思ひます。自分にやれば西洋のも必ず面白いに違いないと思ひます。また隨分人に依りましては、些しも好かなかつたりするやうな方もありますが、私は音樂も好きで御座います。

それから、謠も寔に好きであります、よく自分で仕舞等を舞ますが、運動にもなり、また其娯みは一種別で御座ります、自分に好きでもあり致しますから、能等がありますれば何處へでも參ります、それかと申して學校の方を放つて置いてまでも行き度とは思ひませぬが、まあ大抵都合さへよければ隨分遠い所へでも參ります。

跡見花溪女史

教育上から得た私の實驗

子供の教育のことで御座いますか。私は自分に子を生むだことはありませぬ。が、自分が大切な娘を預つて教育を致して、その子供が立派な一人前の人となつて行くのを見る位嬉いことは御座いませぬ、私は自分に子を有つたことはありませぬが、生徒を世話致しますには、まるで自分に生むだ子と思つて教えて居ります、まあ幼少な子は尚更のことですが可愛がつてやらなければ懐きませず、さうかと申して余り可愛がり過ぎては、これもよくありませぬ、幼少な子供を教育するのはなか／＼六ケ敷ものです。只今は程度が高等女學校で御座いますから、一年級でも大抵十四歳位になつて居ります、その點に於きましては大變に樂ですが、これまでは小學程度の子供を世話して居りましたから、幼少なのは五歳から六歳位な子を預つて居りましたが、私の經驗では、どうも幼少な時から世話を致してやりました者と、それから大きくなつてから來た者とでは大變な相違が御座います、極く幼少なうちから世話をした者は今になりましてもそれこそ自分の眞實の娘のやうであります、他家へ片付きましてから後でも、子供が出來れば其子を見せに參りますと云ふやうな譯で、師弟の間がまるで親子のやうで御座います、さうかと申して大きくなつてから教えた者にはさう云ふ人がないかと申しますと決してさうではありませぬが、併し何うも幼少な時から教えました者とでは違いがあるやうに思ひます。

娘を見て其家の家庭が解る

また學校では、私は隨分八ケ間敷生徒に申すので御座いますが、人と申す者は風采でもつて其人の心が外部に現はるゝものであります、殊に女は男の方とは違ひまして此點に余程注意を致さねばならんと思ひます、毎日此事は機會のある毎に申して居ります、また教場に出て居りまして、授業中でも姿勢の惡い人や、或は又身體の歪むだりして居る者は後方から行つて直してやります。

いくら又學校で嚴しく云ましても、若し其娘の家庭が紊れて居りますれば、折角學校で禮儀作法を習ひましても、それは學校に居る中だけであつて、一度學校の門を潛れは――それでは寔に情けない事であると申さねばなりませぬ。家庭――殊に母親のしつかりとして居ります家庭の子と、またさうでない家庭の子とは直ぐに一見して解ります。どうも近頃の母親は子供に負ける傾向が一般に多いやうに考へます。

私の好きな書物

書物で御座いますか。私は書ものが非常に多いので余り本を讀みます時間がありませぬが、それでもいろ／＼な新しい雜誌が參りますから、何と云ふことなしに讀みます、平常は大抵多く佛教の方に關した書物を讀みます、大きな字でないと眼鏡をかけなければ讀めませぬから、どうも不自由で御座います。

何の書物が好きかと云はれましても、種々なものを讀みますのですから、どれと云ふて取とめて申上るものはありませぬ、私は『源氏物語』は好きでもあり、またよい書物と思ひます。

三年かゝつて法華經を書く

私は毎日、朝でも晩でも隙さへありますれば、日課のやうにして『法華經』を書て居ります。このお經は御承知でせうがなか／＼大部なもので御座いまして、厚い本で八卷になつて居ります。よく人が法華八の卷と申しますが、その御經のことです、朝でも晩でも書きまする時には、先づ硯を綺麗に濯めてから口を洗ひ手を淨めまして、そして香を焚いて、靜座して心を落着けて、それから一心になつて書きますが、これは余り一時に餘計に書くのはよく御座いませぬから、毎日一枚位に定めて居ります、又細い字で書くのですからなか／＼さう一度に澤山書けるものでもありませぬ。私は日課のやうに致して些しづゝ書きまして、この大部の法華經を先き頃漸やく書き終りましたが、書き始めましてから丁度書き終りました日を數へてみまするど、三年間かゝつて居ります、この法華經は釋尊の御說きになりました大乘教の中でも最も優れた尊い御經で御座います。が、更に此度は淨土の三部經を書き度と思ひます

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

百合子姫

小野美智子

一

ある所に大さう景色の好い海邊がありました。冬は暖かくて夏は涼しいといふ氣候の上に、さうした眺望の好い土地ですから、方々の都から見物だの保養だのに來る人はいつも絶間が無い程でありました。

いろ／＼な名所や舊跡の數多い中に、一番不思議で名高いのが妖魔が島と云つて、はるか沖合の小さな島でありました。遠く離れて見ますと、只何の事は無い紫がゝつた山の形の島がポーッと見えるばかりですが、近づいてよく／＼見ますとそれは普通の島ではなく、周圍一里もあらうと思はれる陸は一面に紫色の土で、その又紫色の土の上には、美しいとも奇麗とも云ひやうの無い程種々な色彩をした百合の花が一杯に咲き誇つてるのです。しかもその百合は、色彩や形の美しいばかりで無くて、春夏秋冬、雪が降ろうが霜が置かうが、一度も萎む事も無く散りもしないで今を眞盛りに咲き誇つてるのです。

これ程美しい花でありながら、世にも恐ろしい云ひ傳へが殘つてゐるのです。何でも、此の島には昔から魔物が住んでゐて、此の花の美しいのを餌にして人間を取つて殺すと云ふ――で、うかと見惚れて近寄らふものなら、忽ち海の底に引き込まれ、二度と此の世に返らぬといふので、土地の人は云ふまでも無く、旅人も語り傳へては、只遠くからあれよ／＼と指し驚嘆するばかりでした。

ある年の夏、都から來た澤山の客の中に百合子といふ可愛い少女がありましたその名の通り氣質も姿も百合のやうに優しく、誰にも可愛がられて居りましたが、それだけに又百合の花が一番の好きで、都のお家では澤山の百合の花を作つてゐる位。ですから、この海邊に來て妖魔が島の百合の話を聞くと、さアもうじつとしてはゐられません。

毎日／＼お船で海に乘り出しては、初めは遠くから見るだけで心を慰めておりましたが、日を經るにつれ、只離れて見てゐるだけでは氣が濟みません。何とかしてあの島に渡り、直に花の匂ひを嗅ぎ半日でもあの美しい花の中で暮して見度いものだと、思ひ立つては矢も楯もたまらず。

ある日も例の通り、二三人のお友達とお船に乘つて出掛けましたが、此日は殊によく晴れてゐて、妖魔が島はつきりと美しく綠色の空と水との間に浮び、丁度なよ／＼した手を上げて、

「百合子さん入らつしやい、早く入らつしやい」

と招いてゐる樣です。

百合子はもうたまらなくなつて、

「船頭さんお願ひよ、あの島へ漕ぎつけて下さいな」

と泣かぬばかりにして頼みました。

船頭も他のお友達も、あの島には魔物がゐるのだからと云つて初めはどうしても聞きませんでしたが、百合子が余り熱心に、若し船を寄せなければ自分で海に飛び込んでゝも行きかねぬ有樣なのに遂々根負けして、

「それでは近寄つて見るだけですよ」

といふので、船を其方へと漕ぎつけました。

近よつてよく／＼見ますと、これは又聞いたより幾層倍もの美しさ、眼が覺めると云はうか映しいと云はうか、筆や口では迚も云ひやうは無い位。そして重さうになだれた花の中からは、絶えず薄紫の煙が細々と登つて、何か知ら強い香りが其所ら中に滿ち／＼てゐます。

おゝ可い匂ひ！

とばかり、流石に船の中の人が覺えずかう云つて顏を見合せた時には、もうすつかり薄紫の煙で包まれてゐたのでした

ぬれぬ先こそ露をも厭へと云ひますがかうなつては恐いも何もありません。皆なもう花の香りと紫の煙とに醉はされてしまつて、折角來たからにはせめて一本でも折つて歸らうと、先刻は止めた人までがさういふ氣になつて、急いで船をつけやうとしますとこれはまたどうしたこと、？もう一息といふ所で不思議やばつたりと止つてしまひました。

今は船頭も一生懸命力を出して見ましたが、いつかな船は動かばこそ！

「嬢樣、これは乾度折つちやいけねえといふ知らせで御座りませう、怪我でもしない中に早くお歸りなされませ」

と、とう／＼船頭も力を落してから申しました。

すると、此の時まで默つてゐた百合子は、つと立ち上つて船の端から身を延して白い手に力を籠めて百合の一本を折つたか？と思ふ間もなく其身體は船を離れてさつと立つ水煙の中に姿は見えなくなつてしまひました。

殘つた人達は驚くまい事か、只あれあれと立ち騷ぐ間に不思議や今まであれ程力を籠めても動かなかつた船が、風も無いのにゆら／＼と島を離れて跡には水煙も靜まり返り、島の百合は前の通りに美しく、何も知らぬ顏に水にまで映つてゐます。

それから船頭達が手分して探しましたが皆暮れ分りませんので、

「可哀相に百合子さんは死んでしまつた」と諦めて歸つてしまひました。

二

水に落ちた百合子は、果して魔物にさらはれて死んでしまつたのでせうか。船から身を延して百合の一本を折つたとまでは覺えてゐるが、足をふと踏み外して、ハッと思ふともう人心地は無くなつて、それから幾時間何處を何う流れたとも知らず、ふと誰か呼んでるやうな氣がして眼を開いて見ますと、百合子の身體は見知らぬ濱邊に救はれてゐたのでした。

見ると眼の前には、眞白い鬚の生へたおぢいさんがにこ／＼して立つてゐますから、百合子は不思議さうに、

「おぢいさん、お前さんが私を助けて呉れたの？」

と聞きました。

するとおぢいさんは矢張りにこ／＼しながら申しますには、

「實は折入つて頼み度い事があるので、お前を此所まで連れて來たのだが、何を隱さう私は彼の妖魔が島の守り神で、今から丁度三百年前、天の神樣のお命令であの島に降りて來て、今日まで百合を育てたのだが、何しろ私もこう年を取つたので、早く相續人を拵へて天に歸り度くて成らんのだ。所がどうもその大切な役目を繼がせる者が無いので、心配して居つた所、折よく來合せたお前を見ると、姿と云ひ氣質と云ひ、これ程私の見込みに適つた者は無い。それを見込んでの頼みなのだが、何と聞いては呉れまいか」

との事です。

百合子も初めは只呆れて居りましたがかねて半日でもと願つてゐた百合の中で一生暮せるのかと思ふと嬉しくてたまりませんので、

「ありがたう、それでは私を百合の神樣にして下さるの？」

「おゝ聞いて呉れるか、それでこそ私も安心して天に歸れるわけだ」

とそれからお爺さんの云ひますには、此所から南へ／＼と三里許り進んでゆくと、廣い／＼原がある。その原の眞中に一本の百合を植えると、見る間にその百合は殖へて行つて、やがて原一杯に擴がるであらうから、隨分可愛がつて育てゝやつて呉れと、さう云つて百合の種を一つ百合子に渡したかと思ふと、お爺さんの姿は搔き消す如くに見えなくなつてしまひました。

跡に百合子は、暫らく呆れて居ましたが、氣を取り直してそれから南へ進んで行きますと、成程廣い原に出ました。その原の眞中に教へられた通り百合の種を蒔きますと、見る／＼中に殖えるわ／＼三日と經たぬ間に限りもなく廣い原は眼も屆かぬまで咲き亂れた百合の園となつてしまひました。

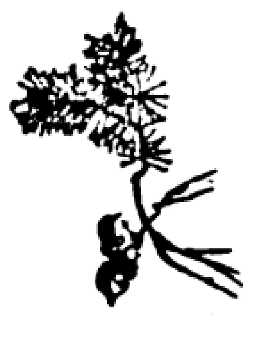
その中で百合子は、朝起きれば百合の頭を撫でゝ遣り、眠る前にも亦、

「御苦勞ねえ」

と一つ／＼に慰勞つてやりますので、花は皆生きてるものゝやうにその前に頭を垂れて懷いてゐます。

此事が誰云ふとなく語り傳へられて、「美しい百合園の姫樣」と云へば誰一人知らぬ者も無い位幸福な身の上となり、幾百年經つても年を取らず、何時までも若い美しい百合の王と成つて暮しました

これと同時に不思議なのは、彼の妖魔が島の百合で、あれ程までに咲き誇つてゐた花も、紫の土も、唯一夜の中に夢のやうに消えてしまつて、跡には普通の土の島が殘つて居るばかりでした。大方これまでの守り神が、天へ登つてしまつたのでせう。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

御伽 獸の外套

嚴谷小波補
日野蕨村譯

昔、一人の王様がゐらつしやいました其王様は、金の髪をした、それは〱誠にお美くしい女王様を持つてゐらつしやいました。ある時、女王様はふとした御患ひから床にお就きになりましたが、段々お惡くおなり遊ばして、自分乍らもう助からぬ事をお氣着き遊ばすと、王様に病床へ來てお頂きになつて、貴下は、妾が死にました後で、お後添ひをお迎え遊ばすやうで御座いましたら、何卒ぞ妾のやうな美くしい、又金の髪をした者でなければお迎え遊ばしませんやうお願ひ申します。これが妾の臨終のお願ひで御座います。

と、お申上げになりました。そして王様と堅く其事をお約束遊ばして、眠るやうに御他界遊ばしました。

王様は、その後面白くない月日をお過しになりました。そしてお後添を迎えやうなぞとは夢にもお思ひ遊ばしませんでしたが、ある日、御閣老が王様に申上げました。

『王様。私共は女王様がお見え遊ばさぬと、何にかにつけて不自由千萬で御座いますから、何卒ぞ王様には是非に御後添を御迎え遊ばして下さいませ。お願ひ申上げます』。

王様は餘り閣老が頼むものだから、御後添ひをお迎え遊ばすお考をお起し遊ばし、使者を全國へ遣して、御他界遊ばした女王様と同様なお美しい新女王をお探しになりました。けれども美しい方はあつても、金の髪をした方は何處にも一人も御座いませんでした。で、使者は手を空しうしてお城へ皈へつて參りました。

さて王様は、一人の姫様をお持ち遊ばしてゐらつしやいました。それは御他界遊ばした女王様のやうにお美しくもあり、又金の髪をなすつてゐらつしやいました。姫様が御生長遊ばしてからの事、ある時王様は姫様を御覽遊ばすと、御他界遊ばした女王様そつくりで御座いましたから急に驚いたやうに姫様をお慕ひ遊ばして御閣老にお仰せになりました。

『朕は姫と結婚しやうわい。彼女は死んだ皇后にそつくりぢや。朕は彼女と結婚しなけりや、もう誰とも結婚する事は出來ん。他に死んだ皇后にそつくりの者は居らんからのう』。

御閣老は、此お仰せを聞くと、喫驚致しましたが、然し直ぐと王様に申上げました。

『昔から父と娘が結婚すると言ふ事は、神様がお禁じ遊ばして居らつしやいます若し王様が姫様と御結婚遊ばせば、神様の御罰にお觸れ遊ばして、到底宜しい事は起りません。御國は亡びて了ひますで御座います』。

姫様が、王様のお思考をお聞き遊ばした時、閣老よりももつとずつとお驚き遊ばしました。けれど王様に此お思考を御斷念遊ばさせやうと思召して、

『阿父様。妾は、貴下と結婚致します事は致しますけれど、結婚致します前に、第一御衣裳を作へて頂かなければなりません。一枚はお日様のやうな金の、一枚はお月様のやうな銀の、又一枚はお星様のやうなきら〱するのを作へて頂かなければなりません。それからまだ千色の皮で作へた、千色の毛飾のある外套が慾しう御座います。それは國中に居る獸と言ふ獸の皮を皆剝いで作へて頂き度いので御座います』。

と、お申上げになりました。そして心裡で『斯麼物は如何しても作へる事出來ないから、阿父様、きつとお惡いお考をお思ひ斷ち遊ばすわ。』とお思召しでしたけれど王様は御斷念遊ばしませんでした國中で一番裁縫のお上手な娘さん達は、一枚はお日様のやうな金の、一枚はお月様のやうな銀の、又一枚はお星様のやうなきら〱する、都合三枚の御衣裳を仕立なければなりませんでした。又獵師達は國中にゐるあらゆる獸を捕へて其皮を引き剝ぎ、千色の毛飾のある外套を作へなければなりませんでした。遂々右の品物が皆出來上がりますと、王様はそれをお城へ持つてお寄越しになつて、姫様の眼の前へ列べて、お仰せになりました

『さあ、愈、明朝は結婚式ぢや。』

姫様は、もう所詮王様の御決心を飜へす事が出來ないと御存知遊ばすと、早速抜け出す御決心遊ばして、夜、皆、眠靜つてからそつと臥床を起きて、貴重な品物をお纏めになりました。金の指輪、金の糸車、金の枠。それからお日様とお月様とお星様のやうな三枚の御衣裳をひつくるめて胡果の殼へお容れになりましたそして千色の毛飾の外套を被て、顏や手足を煤で以つて眞黑氣になさいました。然うして一心不亂に神様を祈り乍ら出て行きました。終宵お歩きになりました。

姫様が只ある大きな森へゐらつした時、大層お疲かれになつて、大きな樹の洞穴へ這入つてお眠りになりました。

日が出ても、姫様はお眠りになつて居りました。お晝時分になつてもまだよくお眠りになつて居りました。其時此森は王様の森でしたから、王様が多勢の獵人を引き連れて、此處へ狩りにゐらつしやいました。獵犬が姫様の休んで居られる樹の處へ來て、姫様を嗅ぎ付けて、其邊を走り廻つて吠えました。で、王様は獵人に、

『その洞に何が潜んでゐるか見屆けろ。』

と、お仰せになる。

獵人共は委細承つて、洞穴を覗いて見て、申上げます。

『王様。洞穴の中に奇妙不可思議な獸が居りまするで御座りまする。事態手前共は今迄あのやうな獸はから見た事が御座りません。千色の毛を致して居りまするぞな。只今は眠つて居る處で御座りまする。はい。』

『生擒にする譯には行かんか。車へ乘せて城內へ連れて歸へり度いものぢやが。』

と王様。獵人が、姫様を引擢まうとすると、姫様は喫驚して、目をお覺し遊ばして、獵人共に申されます。

『妾は、父にも母にも見捨てられました憐れな孤兒で御座います。何卒ぞ御不憫だと思召して、御宅へ連れて皈へつて下さいまし。お願ひ申します。』

すると獵人共は、

『千色の獸。貴様は下働に丁度佳いや。まあ、一緒にお出でな。來て灰掃除なんかしなさい。』

と、言ひました。

然う言ふ風で獵人共は、姫様を車へ載せて御城內へ連れて歸へりました。そして少しも光線の射さない、段梯子の下の檻の前へ行つて、

『千色の獸。貴様は此處へ起臥するんだぞ。』

と言ひました。

それから姫様は、臺所へおやられ遊ばして、倒木や、使水を擔つたり、火を燃き付けたり、家禽を捲つたり、野菜の蟲を取つたり、灰を掃除したり、厭やな仕事許りおさゝれなさいました。

其後、千色の獸は久しい事御不憫な御暮らしをなさいました。お美しい、お姫様は、なほ未だ慘なお暮らしをお續け遊ばさなければなりませんでした！處がある時、御城內に御宴會が御座いました

姫様はクックに、

『クックさん。妾、少し許かの間上へ行つて見ても好う御座いますか。扉の外から見てる事よ。』

とお頼み遊ばしました。

するとクックは、

『然うか。それぢや行つてお出でな。然し三十分丈けだせ。三十分經つたら、直に皈へつて來て、灰を掃除して與れなく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

ちや困るせ。」

と言ひました。

乃で姫様は、ランプを點けて、檻へ歸へられますと、早速外套をお脱ぎ遊ばして、顔や、手足の煤をお洗ひ落しになると、元のそれはそれは誠にお美しいお方になられる。それから胡果を開けて、お日様のやうな光かる御衣裳をお召し遊ばして上へ、宴會見に行かれます。處が、扉の外で見て居る筈であつたのが、誰も四邊に人が居なかつたから、つひつゝと宴會の席場へ這入つてお行き遊ばしました。もう下働の事なぞは忘れて、御自分は姫様であるとの御氣持でゐらつしやいました。と、王様がお見え遊ばして、姫様と御一緒に御舞踊遊ばしました。御舞踊が濟んで、姫様が御低首遊ばした時。王様は「斯様な美しい女は今迄見た事がない。」と、心裡で然うお思召しになりました。そして此女を――と、思召し遊ばして、振顧いて、又姫様を御覧遊ばさうとすると、もう其時姫様は何處へかお消え遊ばして、其處にはお見え遊ばしませんでした、そして誰も姫様の御行衛を知つて居る者が御座いませんでした。お城の多勢の番兵は呼び付けられて、御尋問に遇ひましたが、然し誰一人として姫様を見かけた者が御座いませんでした。

姫様は、走つて檻へお歸へり遊ばすと大急ぎでお召物をお脱ぎ遊ばして、顔や手足を眞黒氣に遊ばして、又元の千色の獸になられました。姫様が、臺所へ行つて、灰を御掃除遊ばさうとすると、クックは、

「それや明朝で宜いから、王様のお汁を煮て呉んな。俺も一寸上を覗いて來てえからよ。然うして呉んな。然し手前お汁の中へ、髪毛一本落すことならねえせ。そんな事しやがつたが最後、もうそれこそ今日限りお拂ひ箱だぞ。」

言つて臺所を出て行きました。

千色の獸は、王様のお汁のパン汁をお煮遊ばしました。お上手にお煮遊ばすことが出來ました。すつかり煮上つて了ふと、姫様は檻から金の指輪をお持ち遊ばして、それを椀へ容れて、お汁をお盛り遊ばしました。御舞踊が濟むと、王様はお汁を命じてお召上がりになる。と、お汁が大層味ひしくて、今迄にない佳い味だと思召す。お汁がお終ひになつた時、王様は金の指輪が這入つて居るのを御覧遊ばして、頗る御不審な事に思召し遊ばしました。で、早速クックに來るやうにお吩咐になりました。クックは王様のお吩咐を聞くと、喫驚して、千色の獸に、

「手前、きつとお汁の中へ髪毛を落さなかつたね。もし聞違つたら打たれるんだぞ。良いか。其積りでゐねえ。」と、言ひました。

クックが、王様の前へ行くと、王様は誰がお汁を煮たかとお尋ね遊ばしましたするとクックは、

「手前共が煮やして御座います。へい。」

と答えます。

「否や、然うではなからう。今日のお汁は第一煮方が違つて居るわい。何時のより格別に甘ひしいのぢや。眞の事を申せ。」

「恐れ入りまして御座います。實の事を申上げますてえと、今日のやつは、その手前共が煮やしたのでは御座いません。千色の獸が煮やしたので御座いやす。へい。」

「然うか。それぢや貴様、早速行つて、千色の獸を此所へ寄越せ。」

千色の獸が參りますと、王様は、

「貴様は全體誰ぢや?」

とお尋ね遊ばす――

「妾共は父にも母にも死に別かれました不憫な孤兒で御座います。」

王様は、猶、

「それぢや何が故に御城内へ來たのぢや?」

とお尋ね遊ばす。

「妾、踏み付けにされに參りましたやうに存じます。」

王様は更に、

「貴様は、お汁の中にあつた指輪を如何して持つて居たのぢや?」

「指輪の事なぞ妾、少しも存じません。」

然う言ふ風で、王様は、何にも御訊正しになる事が出來ずに、千色の獸を下へお歸へしになりました。

又御宴會がありました。千色の獸は前のやうにクックに上へ見にやつて貰ひ度いとお願ひ遊ばしました。するとクックは、

「宜いから見にお出でな。然し卅分したら直ぐに歸へつて來て、王様にパン汁を煮て呉んな。王様はパン汁が馬鹿にお好きでね。」

と言ひました。

乃で千色の獸は、檻へ走つて行つて、大急ぎで、顔や、手足をお洗ひ遊ばして胡果から月のやうな、銀の御衣裳を出して、お召しになります。それから上へ行つて、お姫様になつてゐらつしやると、王様がお見え遊ばして、又見る事が出來たかとお喜び遊ばしました。そして御舞踊がまだ初つて居りませんでしたから、王様は姫様と御一緒にお踊り遊ばしました。御舞踊が濟むと、姫様は又王様が御存知遊ばさぬ中に、飛んでお歸へり遊ばしました。

姫様は、檻へお歸へり遊ばすと、又千色の獸になつて、臺所へ行つて、パン汁をお煮遊ばしました。そしてクックが上へ行つた留守に、金の糸車を出して來て椀へ容れて、それへお汁をお盛り遊ばしました。それから王様がお汁を持つて來さして、お召上り遊ばすと、又前のやうに大層味ひしう御座いました。そして又今度も千色の獸が煮たと言ふ事を白狀致しますクックをお召しになりました。そして又千色の獸が王様の前へお出で遊ばしましたが、「踏み付けにされに參りましたやうに存じます。」と言ふ事と、「金の糸車の事なぞ少しも存じません。」と言ふ事丈けしかお答え遊ばしませんでした。

王様が、三度目の御宴會をお催し遊ばした時、前のやうな事しか起りませんでした。クックは、姫様に、

「千色の獸。手前はお化だねえ。何時でもお汁の中へ金の品物を容れてやがる。おまけに味を馬鹿に巧くしてやがる。だもんだから王様は俺が煮た物よりも手前が煮やがつた物の方がずつと味ひしいとお仰せ遊ばさ。」

と、叱言がましい事を申しましたが、それでも姫様が餘りお頼み遊ばすものだから、遂々お定りの卅分丈け上へお出で遊ばす事を許しました。さて姫様の千色の獸は、星のやうなきら〳〵する御衣裳をお召し遊ばして、大廣間へ御出で遊ばすと、王様は、又お美くしい姫様と御一緒にお踊り遊ばして、今日はとりわけ姫様が美くしいわいと思召し遊ばしました王様は、踊つて居る間に、そつと姫様に知れぬやうに、姫様の指へ金の指輪をお箝め遊ばして、長く舞踊を續けるやうにお仰せ遊ばしました。御舞踊が濟むと、王様は、姫様のお手をしつかりとお握り遊ばして、放すまいと思召しでしたが、然し姫様は、振り放して、素早やく人込の中へ飛び込んで、王様のお目を盲して、お遁げ遊ばしました。姫様は、もう走れる丈け力一滿走つて梯子段の下の檻へお歸へり遊ばすと、卅分はもう疾に經つて居たから、お美くしい御衣裳をお脱ぎ遊ばす事も出來ず、直ぐその上へ毛皮の外套をお召しになりました。そして顔や、手足へ煤をお塗りになりました。が、餘り火急て込んでゐらつしたものだから、一本の指は白い儘になつて居りました。

姫様は、又千色の獸になつて、走つて臺所へ行つて、パン汁をお煮遊ばして、クックが上へ行つた留守に、金の枠をお汁の中へお容れ遊ばしました。王様は、椀の底の金の枠を御覧遊ばすと、早速千色の獸をお召し遊ばしました。そして白い指や、御舞踊の時にちやんと箝めて置いた金の指輪やを御覧遊ばして、姫様のお手を握つて、しつかりとお引き停め遊ばして。

「汝は、朕の新女王ぢや。二人はもう如何樣事があつても、別かれまいよ。」

とお仰せになりました。

乃で誠にお盛な御慶事が御座いましたが、姫様は、もう御崩御遊ばす迄、何御不自由なくお暮らし遊ばしたと言ふ事です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

酒害の豫防と婦人の力

醫學博士、片山國嘉

酒には個人的の害もあり、社會的の害もあり、國家的の害もあり、其影響の及ぶ所が極めて深く且汎きことは、事實上明かなるにも拘らず、實際に於ては禁酒者が少なくして飮酒者が甚だ多いのは、一つは未だ之が豫防法の普ねく行はれぬのも一原因ならんと考へるから、茲には主として其豫防法について話し、大に世の婦人方の戒心と努力とを煩はしたいと思ふ。

酒害と敎育的豫防法

重大なる酒の害を豫防するには、決して一二の方法にのみ頼ることが出來ぬ。種々の手段を用ひて初めて其効を奏し得るのである。害の及ぶ所が色々錯雜して居るに從ひ、之が豫防法もまた種々複雜に渉らなければならぬ。而して第一に必要なるは敎育的豫防法即ち敎育の力に依りて酒の害を防ぐ方法で、之が最も有力なるものである。今日日本に於ては、まだ酒害の實況如何を知つて居る人々は極めて少ないから、之を知らせることが急務ならんと思ひ、吾輩は及ばずながら力を盡したい考であるが、それにしても、特に骨折りて見やうと思ふのは、修業中の兒童及び未成年の男女即ち將來の國民たる人々に此智識を授くる事である。此事が幸に行はれて、まだ無邪氣なる酒の味も何も知らぬ少年に對し、之を飮まぬ前に其禍害を敎へたならば、必ず之を飮むことを愼しむであらうし、よしんば飮むにしても多くは飮むまいし、禁酒會の如きものも自然數多出來るであらうから、此等の點から考へて見ると、無邪氣な少年の腦にこの智識を注ぎ込むことが最も必要であると思ふ。學校では敎員が生徒に諭し、また宗敎家などは說敎の時に禁酒の話をして、成るべく多數の人の耳に之を入れたいものである。其他讀物等によりて可成的衆人の眼に之を觸れしむる事など、皆いづれも敎育的の豫防法に屬するのである。

庭園に於ける加納子爵夫人

酒害の豫防と婦人の力

酒を飮むものは多く男子であるが、家庭に於ては婦人が權力を握つて居るから、一家の主婦たる人々が、能く酒の害毒を知りて居らば、假令夫が飮むとしても、之を加減することを得べく、可成口にさせぬやう制裁することも出來やうと思ふ。然るに從來は其點が大に闕けて居る。妻は夫の註文次第幾干でも供給する。時として何かねだり物でもしたい時には、殊更多く之を飮ませる。酒が夫の身體に惡いなどゝいふ念は一向持たない。故に吾輩は、國民の半數を占むる所の婦人が、明かに酒害の重大且慘烈なることを認め、婦人同志で禁酒の策を企てる事となつたならば、其禍害の半は確かに防止し得らるゝならんと信ずる。或は禁酒會を開いて演舌することも必要なるべく、節酒會の設立の如きも幾分の効力あるに違ひない。吾輩は節酒禁酒などゝいふ狹い區域を爭ふて問題とする必要がない。酒の害を豫防するに足る手段ならば、何でも贊成するに躊躇せぬのである。

風俗改良と酒害の豫防

風俗の改良に依りて酒害を防ぐことも、重要なる一豫防法である。社會の風俗てふものは、非常に有力なるもので、折角禁酒しやうと思ふても、之に妨げらるゝ事が多い。之は本人の意思が薄弱なためでもあらうが、半以上は社會が責任を負はなければならぬと思ふ。本人が廢めやうとしても、一般社會が之を援助せず、マア今日はお祭禮だ、一杯位は宜からう、お神酒だなどゝ言つて飮ませる。此等の陋習を革めるのは容易の業ではない。畢竟酒に關する知識が普及せざるより起る弊である。その知識が普及すれば、有害物を人に勸めやうといふ念が起らなくなつて來る。此事に就ては、社會に大勢力を有する所の婦人が注意し努力したならば、慥かに大に効果を擧げ得べしと思ふ。改良すべき風俗にも種々あるが、先づ儀式とか祭禮とかの時分には、飮酒者は今日は儀式だから、祭禮だから、まづ一酌と言つて勸める。併しながら儀式祭禮等といふことは、元々神樣の造り出せるものに非ず、人間が作つたものであるから、惡い風俗は改むる必要がある。飮酒の如きは、種々の點から見て、人體に損害を與ふるものなれば、どうも神の授けたものとは認め難い。曾て未成年者禁酒法案が議會へ出た際にも、此等の場合を除かうといふ說が出たやうであるが、何故にそんな必要があるか、この位の道理が解らぬ神樣ならば、神樣に敎へて上げるが宜い。此等の風俗は人智が進めば自然となくなるのだ。假令儀式にせよ、婚禮にせよ、人に害ある物を飮ませ、又は夫婦の間に之を用ひなければならぬといふ道理は、決してある譯のものでない。又客を待遇するには、可成客の益になつて悅ぶものを擇ぶべく、喜んでも害になる物は勸むべきでない。乍併此等の風俗は、一時に革むることは難い却て世の反抗を招き冷評を買ふことがあるから、時日は要するけれども、徐々に之を改良するより策があるまい。又其智識が普及すれば、自分は飮んでも、他人には強ひて侑めぬやうになる。豫防上より見れば、一般にそれだけでも大なる差異がある。禁酒するに至らんでも、幾分づゝ革めて行つても、禍害の減少するは悅ぶべき事である。之を矯風的豫防法と稱するのである。

酒害と團體的豫防法

之には明かに禁酒會と稱する團體を始め、明かに禁酒會とか節酒會とかいはんでも、風俗改良會とか其他の名稱の下に禁酒を行ふ團體をも含むのである。又同種の社會に於て、朝夕面を見合はせる同志者が、互に申し合せて行ふ禁酒には或制限等も、矢張一の團體的豫防法と看做して差支ない。兎に角飮量をある程度まで節するとか、又はある日時の外酒を用ひぬとか云ふやうに、一種の制裁を設けて、漸次良い方面に向つて進むならば、之も確かに有力なる豫防法ならんと考へる。

酒害と法令的豫防法

法令に依りて酒害を防ぐにも方法が種々ある。禁酒法案の如きも其一つであらう。但し吾輩が直接同法案に贊成せざる理由に就ては、茲に一言して置きたい事がある。それは、吾輩は禁酒論者ではあるけれども、單に其害をのみ調ぶるが目的でない。如何にせば社會の犯罪者が減少するかといふ事を研究して居るから、之に依りて該法案に對する態度が定まるのである。從來は刑法上十二歲までが無罪で、其以上を罰する規定であつたが、今度の新刑法に於ては十四歲まで無罪となつた。この年齡に就ては、吾輩は十六歲位までに改めたいと論じた事もあるが、此說は實行されなかつたけれども、兎に角二年だけ進めることが出來た。卑見を以てするに、未成年者の犯罪には、罰則を附せず、警察や監獄の門は可成潜らせずして、別に感化の方法を設くるが得策なやうであるから、此點より考へて、罰則を附したる禁酒法案には直ちに贊成しなかつたのである。乃ち一方に利益があつても、一方に於て如恁缺點を存するのは面白くないと思ふ。

酒稅を增す法令を設くる事は、大なる豫防の効力を有するものなれば、若し政府に於て必要ならば尚は增徵するも宜からうと思ふ。併し濫りに稅金を增すが能事でないから、適當なる方法を要する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

國樂に對する感想

東京音樂學校長　湯原元一

西洋音樂に近頃耳を傾くるものが多くなつたのは喜ぶべき現象であるが、まだ國民全體には普及して居らぬ。中流以上の家庭の或一部分に限られて居るやうだ。必覺西洋人と日本人とは、理性や悟性は一致して居ても、感情が違ふからであらう。異なる感情が生み出した音樂を取つて、直に日本に強ゆるといふ根本の意見が誤まつて居るから、これはどうしても西洋音樂を日本人に適合するやうに化さねばならぬと思ふ。其手段としては、西洋音樂の骨組はさて置いて、其色合だけでも日本風にする必要がある。

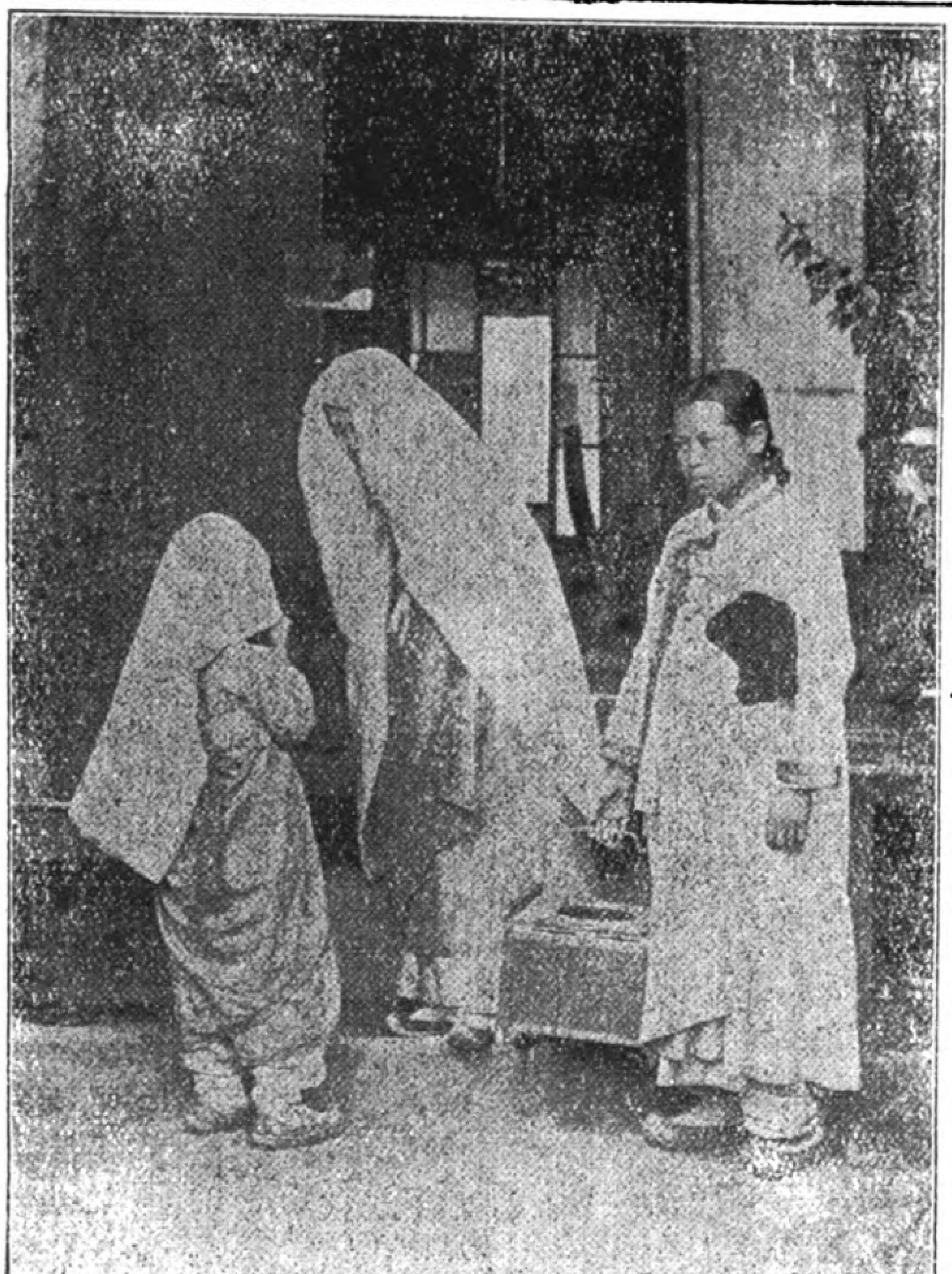
或席で牧野前文部大臣が話されたのを聞くと、ハンガリーの音樂を聞くと、何處となくハンガリー風の處がある、然るにその歌曲はどうかといふと、獨、佛、伊から輸入したもので、それをハンガリーでは巧みに咀嚼して居るといふ事であつた。處が日本ではそのまゝ丸呑みとは悲しいことである。で吾輩どうかして、西洋音樂を充分に研究し、且つ日本音樂にも通曉したる大作曲家が、日本の趣味感情に適したる新なる日本音樂を作り出されんことを深く希望して居る。現にその第一歩として、我校にては邦樂調査係を設け、他日日本音樂を建設するものゝ資に供せん爲め節々の材料を蒐集しつゝある所である。又今度校則を改正して新に作曲部を置いたのは、矢張作曲家養成に勉むる爲めである。この樣にして得たる國民樂が、たとひ西洋のものよりも劣つて居ても、過渡時代に於ては仕方がない。遠き未來には大成する時期か來るであらうと思ふ。樂器などはどうでも宜い。西洋の樂器を其まゝ使用するも差支あるまい。要は只歌曲の問題にあるのだ。

日本では、音樂としいへば、器樂に限つて居るやうであるが、器樂となると、風琴一臺を求むるにも容易でない。特に日本の家屋は、構造上之を備付けるに不便である。聲樂は之に反して、頗る安價な、而も精巧な、各人各個に有して居る器械で趣味を味ふことが出來る。で行々は大に聲樂を發達せしめて、幼稚園より大學、其他すべての階級に合唱團を組織して以て趣味の向上、愛國心の振興に供したいものと思ふ。それにしても、前述の作曲家がどうしても必要である。古諺に「國民より採りて國民にかへせ」といふ事があるが、日本樂にも採るべき點が少なくない。故にその長所を採り、之に西洋樂を參酌して、完全なる國樂を作し、以て國民に供給せねばならぬ。今日のやうにベートーヘンやバハにかぶれて居る内は、前途尚ほ遼遠なりと謂はざるを得ない。

支那の新年

大原古丘

皆樣も御存知のやうに支那は四百餘州と申しまして世界中でも最も廣大な國の一であります。で、所によりましては風俗や習慣が大層異つて居りまして、一概に斯うだと申すことは出來ませぬのです。今私が皆樣にお話しやうと思つて居るのは支那でも南に寄つた貴州の新年の有樣であります。何卒その積りで聞いて戴き度い。



韓國中流家庭の婦人

私は新年のお話を致しまするに歳の暮の話から始めやうと思ふのです。と申しますのは新年の準備などは大程年の暮にするもので御座いますやうです。

支那でも日本と同じやうに、年の末になりますと贈物を致すのですが、その品物は餅だとか、肉だとか、菓子だとか、それから果物だとかを送るのであります。その點は大體日本と異る所はありませぬが、日本では鏡餅だと云つて二つの大きな餅を重ねて送るのでありますが、支那では斯樣な鏡餅と云ふものは御座いませぬ。お正月に限らず支那では餅を重ねて鏡餅を作ることは絶對にないのであります。神樣の前にお備へする時でも決して斯樣なことは致しませぬ。それから支那は日本と異つて居まして多くは山國で海が少なう御座りますから、從つて鮮魚が少ないからではありませうが、日本で鮮魚を使ふ場合には此國では獸類の肉を使ふのであります。で、日本で新年に鯛とか、鰤とか鮭とかを使ふ所に牛の肉とか、豚の肉とか、羊の肉とかを使ふのであります。それから席を送ると云ふことがあります。これは料理の目錄ばかりを送つて、その目錄に記された品物は、それを貰つた者が直接に指定された料理店から取り寄せることの出來るやうになつたものであります。これは日本で申しましたら三越だとか、丸善とか云ふやうな店の切手と同じやうな種類のものでありませう。

歳末の贈物の御話は此の位にして置いて偖てお正月のお話に取り掛りませう。

支那では門松と云ふものは立てませぬ。先づ門松の代とも云ひませうか新年になりますと門に色々な飾をします。對聯と云ひまして赤い紙を門の兩側に貼るのであります。これは門の高さの約三分一位の長さでありまして、一方には「聖代於今多雨露」他方には「人文從此會風雨」とか云つたやうなことを記すのです。それから門の横木には五色の紙を色々に切つて貼るのんあります。その切る物は龍だとか、麒麟だとか云ふやうな目出度い毛獸類の形だとか、「祝」だとか、「福」だとか云ふ吉相のいゝ文字だとかであります。斯樣な門の飾りはお正月が濟んだと云つて取り除けはしませぬ。翌年までそのまゝにして置きまして、翌年の飾をするとき初めて剝ぎ取るのであります。

支那にも雜煮とか屠蘇とか云ふものがありましてお正月には屹度之を用ひるので之は日本と大した相違はありませぬ。

それからお正月は如何な遊戲をするかと云ひますに、骨牌とか、羽根とか、幺六とか、打牌とか云ふ遊びをするのであります。幺六と云ふのは骰子のことでありますか、これで一種の賭博をするのであります。打牌と云ふのは厚い小長い紙に小と大との文字を一から十まで十枚づゝ二組作つて、これで勝敗を決する樣に出來た者であります。それから骨牌と羽根は略ぼ日本の者に似た者ですが、羽根は日本で木欒子を用ひるのに、彼國では貨幣を布に包んで作る位の相違であります。

申すまでもありますまいが支那は未だ舊暦を用ゐて居るので御座います。一般に正月は十五日までとして居ますが、九日の夜頃から龍燈と云ふ者を出すのであります。今この龍燈のお話を致しませう。

この龍燈と申しますものは木綿だとか、紙だとかで龍の形を造つたものでありまして、その中に火を點くるやうになつた長さ十丈計もあるものであります。これは若者が十二三人もかゝつて擔ぎ廻るのでありますが、その先驅には棒の先に圓い球の形をしたものを三四人擔いで行くのです。これも矢張り木綿だとか紙で作つて中に火を點くるやうに出來た赤い球であります。これは支那の旗に龍が日の丸を呑まうとして居る形に倣つたものでありませう。斯な風に龍燈を擔ひで廻りますとそれを見物する人はその龍燈を目掛けて花火を投げ掛くるのであります。これは九日の夜頃から十五日の晩までゝありまして十六日になれば焚いて仕舞ふのであります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

夫婦の情愛

「涙襟集」を讀む

ひつじ

一

赤穂義士の一人武林唯七の母が、赤穂大變之後、一子唯七に與へて其の志を勵ました悲壯の遺書は、嘗て本誌に御紹介した事があつたと思ふ。眞情流露、實に文章といひ、思慮といひ、分別といひ、有髯の男子が却つて心恥かしく感ずる程であつたが、それに優さるも劣らぬ眞情の文學として、同じ義士の一人小野寺十内が、その妻丹子に與へた柬集――「涙襟集」といふ本のある事を聞いて是非一度は讀んで見たいものだと思つて居たがついに其の機會なく、窃かに殘念に思つて居たが、先頃偶然長田偶得君の『時代の面影』を讀んで見たら、その中に此の『涙襟集』に關する一節があつたので、愈々渴望の度を高かめ、諸所を聞合せた末或る人から一部の寫本を借り受け、はじめて年來の宿志を果す事が出來たのである。

小野寺十内は御承知の通り淺野家譜代の臣で、當時は京都御用屋敷の留守居役を勤めて居た人である。藩中の老人株で温厚篤實、極めて常識の發達した人であつたから、自然人々の氣受けもよく、家中で何か事が起ると、それなら先づ小野寺氏に相談したらよからうと言つたやうなわけで、十内の人望は隆々たるものであつた。

淺野内匠頭が吉良上野之介の無禮を怒り、所もあらうに殿中に於いて刄傷に及ばれ、内匠頭は切腹、御家は斷絶といふ兇報が京都の御用屋敷に屆いたのは元祿十四年の三月、春とはいへど山國の、都の巷には未だに比叡颪が吹き荒む頃であつた。

二

思ひがけざる大變に、遉がの十内、一度は膽を拔かれた形であつたが、赤穂には一代の智慧者大石も居る事なり、萬事は大石と相談の上進退を決せんものと、殘務一切を處理し、後事は一切妻の丹子に任かせて、氣の利いた若黨一人召連れ、萬一の時の用意にと、具足一領、槍一本、白帷子一つ、それに當座の着替一襲を挾箱に入れて、殆ど全速力で京都から赤穂の城下へ駈付けた。

赤穂の城中は宛然鼎の湧くが如き有樣である。藩内は誠忠無比の大石黨と、不忠不義の小野黨の二つにわかれ、殊に血氣に逸る義士の面々は、理が非でも潔く官使を引受けて城を枕に討死すべしと主張し、捨てゝ置いたらどんな大事にならうも知れぬ。かくては折角の苦衷も水の泡になるわけと、遉が一代の智慧者と呼ばれた内藏助も、一時は途方に暮れる許りであつた。此の間にあつて温厚篤實の老十内が、極力大石を贊けて急進黨の鎭撫に盡力した功勞は實に非常なものであつた。

四月十日の日附で、當時京都に留守居の妻丹子に與へた手紙にはかう書いてある。

……我等は、存じの通り、當家の初めより、小身ながら今まで百年御恩澤にて各々を養ひ、身あたゝかに暮らし申候。今の内匠殿には格別の御情に預らず候へ共、代々御主人くるめて百年の報恩、又は身不肖にても、一ぞく日本國に多く候ふを、かやうの時にうろつきては家の疵、一門の面よごしも面目なく候故、節に至らば潔く死ぬべしと儲かに思ひ極め申候。老母を忘れ、妻子を思はぬにてはなけれども、武士の義理に命を捨つる道、是非に及び申さず候。合點して深く嘆き玉ふべからず。母御樣いかい程の間もあるまじく候ふ早々、如何樣にもして御臨終を見屆け玉はるべく候。年月の心入に、如才あるべしとは露ちり思はず。申すに及ばず候へ共、賴み參らせ候僅かの金銀家財、これを有きりに養育しまゐらせ、御いのち猶ほ長く、資盡きたらばともに飢死申さるべく候。是れも是非に及ばず候。

大にしては社稷の存亡小にしては一身の大事に處して、飽くまで冷靜の態度を失はず、老母の奉養、妻子の行末に就いて、縷々數百言をつらぬる所、何等纏綿の情思ぞや。盡すだけを盡して、それ以上はもう天命に任せるより外はない。老母の命數猶ほ盡きず、金銀財寶悉く盡きたならば、その時こそ潔く共に飢死せよと教ふる所、悲痛壯烈何物か是れに加へんやである。

三

機運愈々熟せりとの情報を得て、養子幸右衛門同道、欣躍江戸に向ふの途上、丹子に寄せた歌がある。

都の空次第に遠ざかるに

故里の心あてなる大比叡の　山もかくるゝ跡の白雲

日々に時雨ふりければ

別れ行く思ひの雲の立ちそふや　今日もしぐるゝ東路の空

風の音にも心を躍らす忍びの旅路にして、猶ほ、此風流あり。「山もかくるゝ跡の白雲」、婉々たる餘韻味ふべからずや。

吉良家の樣子も大方わかつたので、愈討入の準備に取かゝらうといふ、十一月三日、江戸の宿屋から出した手紙にはかう書いてある。

(前略)吾等立て十日ばかりして、文も賴みてお越し候へと申置き候。今日此の頃は文來るかと、其の傳手約束の方へ尋ね候へ共、昨日までは參らず候て、頓がてこそ屆き候はんと待兼ね申候。便聞き申度待ち申す事に候。

新婚の夫婦でもあれば格別、是れが一方は六十歳、一方は五十歳といふ老夫婦の手紙であるから面白いではないか。

一、相宿もして、愈々元の宿に居り申され候や。さもなく心細くして外へもお越あるかと思ふまでに候。我等のふだんの手廻りにありし小道具もなく、家も廣きやうにて、次第々々に物少なになりて、かくなる有樣、問ふ人も段段絶えげになりて、心細く暮しめされ候ふ事と、其の有樣思ひやりて見るやうにて候。それは覺悟の前の事、今更心苦しきとも思ふまじき道理にて候。唯だ息災にて身のくづをれぬやうに心得申さるべく候。我等への心入にて候。

身まわりの手道具も日毎に數尠なになり、問ひ來る人も絶え〲になりゆくべく、如何許り心細く暮し居る事なるべしと思ひやりて、「その有樣見るやうにて候」と消息したる十内の優しき同情は、老いたる妻の心に限りなき慰籍を與へた事であらう。

(前略)夕美濃屋より十五日六日の文二通屆き申候……十六日までのたより、詳しく珍らしく逢見たる心地にて卷返しそろ〱見申候。そもじ以前の如くに左の胸の下痛みて、左をしきては寐る事ならず、脈もつかれたるとて慶安殿藥たべ申され候由、尤に存候。何氣のつかれ、さこそ其の筈にて候。何事を思ひても、身よはりてはならぬ事にて候。便少なき身になり候へば、すくやかに如何やうにても世を渡る事肝要の覺悟にて候。いかう衰へ申されべく候と推もじ致し候。一しはいたはしく思ふばかりにて候。

「逢見たる心地にて、卷返しそろ〱見申候。」といひ「いかう衰へ申されべく候と推もじ致し候。一入いたはしく思ふばかりにて候。」とある數十字に、夫婦の愛情が活躍して居る。強い許りが武士の資格と思つて居る人々に、是等の手紙を讀ましたい。

四

序だが十内の妻丹子の兄灰屋藤兵衛は妹に似ぬ義理知らずで、十内江戸下向の後は、まるで義絶同樣、振向いても見ない有樣であつたから、十内が留守宅の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

生計費に就いての心配も一と通りではなかつた。手紙のうちにもそれ等の消息が、こま〳〵と書いてあるが、さまではと凡べて略する。妾のうちは何かと取紛れて居るが、夜は越方行末の思出に、まんじりともせず打明かす事が度々あるとの丹子の文に答へて。

（前略）御申しの如く、月日のたつに従ひ、憂きは増し候はん事見るやうにて候。常々申す如くに、人間の盛衰常なき事の道理を、能々さとり候はゞ、憂きも却つて誠の道に入る種と成可申候。かやうの事は有情合點の前にて候………互に身のさまをも心のうちをも、かくこそとせめて思ふを忘れぬ種にも、あるうちの心ゆかしとも思ふより外にすべき方なく候。たゞいたましく思ふばかりに候。

義に勇んで情を忘れず、恩愛の私情に理非辨別を誤らざる處に十内の人格を見る。

此方の歌、取りわけ逢阪の歌あはれのよし、能く聞き給ふと存じ候。その許の歌、さて〳〵感じ入りまゐらせ候。是れに就けても必ず歌をば棄てずに絶えず詠み申さるべく候。

死生存亡の間にありて猶ほ此の風流ぞ。何等の雅懐ぞや。お丹が特にあはれに感じたといふ十内の歌は

　別れても又あふ阪とたのまねば たぐへやせまじ死出の山越

の一首である。

雁を此の頃寄合ひて料理致し候ふとて自から鳥屋に買ひに參り候。あまり見事に安く候故、一羽買ひ申候。そもじへ贈り申すべき爲めにて候。味所鹽して送り申候。あとは幸右衛門方へ贈り申候。

汽車あり、汽船あり、小包あり、郵便ある今日の時勢とは違ひ、當時は書狀の往復にさへ、優に十數日を費したものである。かくも不便な時代にありて、男手の面倒をも厭はず、わざ〳〵老妻の爲めに鳥肉を贈る――その親切、其の愛情は到底自己本位一點張りの、今の若い人達には見られぬ所である。

四

かくて臥薪嘗胆の苦節空しからず、明後十五日には、愈々吉良家へ亂入すべく手筈萬端殘りなく相整つた元祿十五年十二月十二日、丹子に送つた手紙にはかう書いてある。

一筆申入れ參らせ候………此元の左右今か〳〵と待給ふらんと、その心のうち推はかり參らせ候。此方の事やう〳〵時至り參らせ候。此の上いかなる大變あらんは格別、替りたる事なければ、最早今日より三日は過ぎ申すまじく候。二年のうち、我人幾千の心づくし、身を碎き候甲斐ありて、此時節に至り候事、先々是までをも本望と悦び勇ましく、先にも嘸ぞ心あるべければ勝負は互の天運次第にて候。兼ねても申す如く、公より如何やうの御咎にて縦令屍をさらされ候ても、少しも恨とも物うしとも思ふまじく候。忠義に死したる體を天下に見せて、人の心を勵まさん事、却りて本望にて候。

義に富み、情にあつき、武人の面目を見ずや。死生は一に天命に任かせて、盡すべき事を盡して止まむとは、實に四十七人の素願であつた。

今更思ひ殘す事もなくて、心よく打ち候儘、其許にてもせめての本望と思ひ給へかしにて候。此の度の事、我身一人にはあらずとも、かやうに珍らしきわざにて成果つるものと[illegible]ひて、うきめを見給ふ事、いつの世の惡緣かと思ふに甲斐なき。是非に及ばぬ因果の程、互に思ひあきらめ候外なく候。此許の埒あきたりとの便は、一番に玄溪より告知らせ申すべく候。世の沙汰も聞きつくろいて、此の程も申入れ候如くの心得を、よく〳〵めさるべく候

「後事萬端殘りなく」とは正に是れをいふであらう。而かも此の手紙は「時節も近づき、四邊も銘々に支度の申合せなどにて人多く」、氣も心もそは〳〵して居る間に認めたもので、十内も「此文も夜明に二階に上りて漸々書き候」と斷つてある。猶々書きには

なほ〳〵末代までも天下に名を書きとゞめん事、誠の本望是れに過ぐべからず、そもじ見ても嬉しく思ひ給ふべきと、

せめてそれぞそもじへ名のかたみとも覺え給へかしにて候。

何といふ潔い言葉であらう。翌日の手紙には。最早やいふべきふしもなく、唯だ其許の事思ひやるばかりにて候」と筆を起して、思ひついた事を二つ三つ書きしるし、終に左の如き辭世の歌を認めてあつた。

　忘れめや百にあまれる年を經て事へし代々の君がなさけを

五

敵討は豫想以上の首尾であつた。一同の喜びは實に天にも登る許りであつた。當夜の實況は十内の手紙に詳しく書いてあるが、あまり長くなるから凡べて略する。十内は熊本侯細川越中守の邸にお預けとなつたが、元祿十六年二月三日の手紙にはかう書いてある。

冬とし十五日の夜、細川樣へ參り、其夜にもお仕置にあるべしと思ひ候處、思ひの外この儘にて年暮れ、正月さへ過ぎてきさらぎの今日まで、また此世の御酒をたぶる事、不思議といふも愚かにて候。いかなれば此上のゆくりはあるまじく候まゝ今日の中にも極り候はんと、何れも御左右を待ちくらすにて候。（中略）日永にてする業もなく心の儘寢つ起きつ、好きの寢酒も晝酒もたべて、十七人の同志夜晝こし方を語り、馳走人衆も心やすく挨拶にて、淋しくもなく今日まで五十日暮らし申候。例の歌よみ聞かすれば、人々袖をしぼり感じ入候。いかい事詠じちらし申候。何とか成るべくは跡より一筆送りていゝやるべく候。幸右衛門事も心やすく思ひ給ふべし。我歌にて諦らめ候へかし。

　迷はじな子と共に行く後の世は心の闇もはるの夜の月

されども猶ほ忘れ難きは故郷に殘した老妻の上である。五十幾つの丹子は、六十有餘の十内に取りて天にも地にも唯だ一人の愛人である。同じ手紙の末に

死ぬべき際となれば、古郷も忘れたらんと思ひもめさるべく候。此の歌このごろ思ひ付候ふまゝ申入候

　膳部に色々春の野菜出されたるを見て

　武藏野の雪間も見えつ古郷の妹が垣根の草ももゆらむ

以下の一節は十内の遺言とも見るべきもので、死後の覺悟を繰返したものである。

我等御仕置にあうて死ぬるなれば、兼ねて申合せし如く、そもじ安穩とてはあるまじきか。左樣候はゞ兼ての覺悟の事、驚き給ふ事もあるまじく、取りみだし給ふまじきと心安く覺え候。もし何事なき身となりて、都の傍にも住み給はば、貞玄樣を呼びよびむかへてとも憂きを語り慰め、久しからぬ御命を見屆け參らすべく候。賴み置く事は是れにて候。そもじだにある身となり給ふ事も覺悟の前なれば、是れも思ひ置く事もなく候。いかばかり思ひ殘しても甲斐もなきにて候。兎もかうもして、一生を幽かにも送るを樂しみと諦らめ、心を忘れ給ふべし。

意長うして筆盡さず。最後にはかう書いてある。

いか程申しても盡すまじければ、是迄にて親子共腹切りたりといふ左右程なく聞え申すべく候。何事も人界の常なきを悟り給ふより外あるまじく候。かしこ。

實に取るまじきものは弓矢なりけり。かくて十内幸右衛門父子は、願通り翌二月四日義士一同と共に切腹仰付けられた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

御茶之水小林寫眞館特寫(禁轉載)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

皆様（みなさま）
今日（けふ）もまた
丈夫（ぢやうぶ）で元氣（げんき）で
心（しん）から愉快（ゆくわい）に
「暮（くら）す様（やう）」
「ゼム」を
今（いま）すぐ
召上（めしあが）れ

消化と毒けし
ゼム

▼全國各藥店にあり

院長診察月水金木前松田醫學士診察火土
前勝者施診火木前入院診斷隨時應需松田
林兩副長は目下當院に在勤
電本八八八（病院用）
　八九八（私宅用）
東洋内科醫院
東京神田區駿河臺鈴木町二（御茶水橋畔）
院長醫學士　高田畊安
神奈川縣高座郡茅ヶ崎村（停車場所在）
南湖院

最上醤油
キハク印
於東京博覧會
名譽大賞牌受領
釀造元　千葉縣野田町
茂木七郎右衛門
（商標キハク印）

キハク印醤油は味がよくて調理にかなつて居ると云ふことは皆さん一般の評判てすどーか其あぢのよくてそして經濟てあると云ふことを御ためし願ます

東京支店
日本橋區小網町三丁目
電話浪花五七七四
中野長兵衛

新流行ローマ風 専用
日本暖爐
●暖房器に對する吾人の理想は●
一、室内の風致を損へ優美の體裁を具ふる事
二、携行自在にして輕便なる事
三、其の洋室和室客室寢室なるとを問はず何れにも適應すべき事
四、あらゆる階級を通じて需要に適すべく價格低廉なる事
五、燃料消費高一時間僅に五六厘にて足る事等なり
みよし組は本器を以て如上の資格を完備する者と確言す
實用新案登録出願中

定價八圓特價五百限
六圓五拾錢
發賣元
東京九段
みよし組
電話長番町333番
振替口座東京18762番

めりんす
ゆふぜん
太物いる
人形町通り
赤のれん
おばなや本店
電浪四三四五

△意匠嶄新破格廉價札付

儀式用 鼈甲 櫛笄
英國製 鍍金 櫛中差
金銀 寶石入 簪指輪
帶止ピン
珊瑚珠 翡翠 玉簪
根掛リボン
束髮三枚揃

格安土州珊瑚直取引市價よりは三割方廉價
御便利爲御持古るしの小間物引取交換仕候
東京市神田須田町（電話本局二〇七六番 振替口座一八一一番）
小間物商三井屋德次郎
京橋區新橋際 博品館内支店
神田裏神保町 東明館内支店

より寄辭を得薄毛も濃くなり生へざる
毛生し嬉さの餘り困る方に分與せしに
有餘の禮狀を受け不思議のまゝ尚困難者へ
三錢郵券添御照會あれ……
東京々橋銀前堀一ノ四　河村愛子

御羽織紐
帶締
其外組糸一式
東京日本橋久松町
組糸舗
電話長二一五八
振替五六二九六

產科婦人科專門
診察毎日午前 入院隨時
淺草區左衛門河岸
電話下谷一〇二八
岩田病院

最新流行
美術藁檜稿
紫諸小間物類
束髮用品
和洋化粧品
香玉石鹸
東京日本橋通よし
よし忠
浪花一四四六

謹賀新年
新年勅題模様
御半ゑり各種
年末年始御贈答適當品種々
東京日本橋通り三電車停留場前
わんぷらいす、しよつぷ
ゑり宇
電本二九四七番

恭賀新年
御年玉御進物用品
絹綿麻 ハンカチーフ各種
流行の絹首巻 各種
シャートル博覧會に於て金牌
全國特產品博覧會に於て金牌
東京市日本橋區フキヤ町
中西儀兵衛
電浪七百番

恭賀新年
半ゑりは
神田 赤のれんに限る
本店 神田裏神保町壹番 電話本局二八五三
出店 新橋博品館階上

謹みて新年を祝し奉る
一月一日
愛國婦人發行所
同人一同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人画報

一月一日　正月の巻　一冊 廿五錢　郵稅二錢　六冊稅共一圓五十錢　十二冊二圓八十八錢

書報

▼三皇孫殿下御最近眞影
▼竹田宮妃殿下と王子殿下
▼伏見宮三女王殿下
▼山階宮女王殿下
▼梨本宮二女王殿下
▼庭に於る閑院宮三女王殿下
▼武子女王殿下御染筆……

▼歐洲諸皇室の諸太子
▼犬の正月▼麗しき春
▼二侯爵夫人の散歩…
▼女王と女官▼新夫人
▼婚禮道具と祝ひもの
▼婦人教育會總會…
▼如斯て龍甲は出來る
▼夫婦人形と花色々…
▼歌留多遊びと追羽子
▼日英博出品庭園模型
▼戊申婦人倶樂部發會
▼青山御所女官と少女
▼都下名園▼令孃鑑…

附錄▼見よ二大
▼蕾唇と戌の春　島崎、中澤二氏筆美人畫

讀物

◉婦人に必要なる思想　浮田博士
◉家庭の婦人と國家　一木博士
◉朱に染まぬ婦人　中島徳藏
◉結婚の條件を公言せよ　宮田修
◉私政の家夫文人相　大町桂月
◉苦勞性の夫を遇人相　◉寶船
◉娘の春　三宅花園
◉舊れを忘ぬ新年　三輪田眞佐子

◉新年の思ひ出　跡見花蹊
◉犬千代と猿面冠者…
◉夜の金子子爵夫人…
◉樣々な家庭のお正月
◉寡婦の正月　國木田治子
◉和歌入門…　佐々木信綱
◉女學生のお正月生活
◉餅と蜜柑…　瀨川博士
◉正月の小兒…　岸部福雄
◉新譯源氏物語…みづほ
◉歐州諸皇室の諸太子

東京飯田町四丁目四番地
東京社
電番二三三九
振替東京二六八

東京春陽堂發行

吉岡向陽氏　高野斑山氏共編

目下大評判なる

家庭お伽話

●臨時號定價平常通り八錢郵稅二錢●

▼一月元旦臨時發行

卅八編には

附錄　澤山

▲**芳流閣**（斑山）

馬琴が卅年費やした八犬傳中の目ぬきの場所と評される一段を斑山氏が腕によりをかけて綴つたものであらう作戍の歳の少年文學中では第一の讀ものであらう

▲**忠犬譚**（向陽）

向陽氏が歐米各國の譚のうちから犬の話として最も秀れたものを選んで讀者諸君の爲め例の妙筆を揮われたものこれにます讀物はない

▲附錄「犬に關するお伽話」

既刊目次

定價壹冊金八錢郵稅二錢

(第一篇)	猿と娘	(外二話)
(第二篇)	泉わ仙女	(外一話)
(第三篇)	老人わ寶	(外一話)
(第四篇)	蛙の王子	(外二話)
(第五篇)	百合若	(外一話)
(第六篇)	周章者	(外一話)
(第七篇)	鬼の面	(外二話)
(第八篇)	田螺の嫁樣	(外一話)
(第九篇)	白鳥物語	(外一話)
(第十篇)	山羊娘	(外一話)
(第十一篇)	鴻の池	(外一話)
(第十二篇)	初日の娘	(外三話)
(第十三篇)	牛の報恩	(外一話)
(第十四篇)	馬鹿婿	(外一話)
(第十五篇)	黃金城	(外一話)
(第十六篇)	鬼女	(外一話)
(第十七篇)	孝子と難題	(外一話)
(第十八篇)	花島の王女	(外一話)
(第十九篇)	鵜取兵衛	(外一話)
(第二十篇)	竹篦太郎	(外一話)
(第廿一篇)	對王丸	(外一話)
(第廿二篇)	狐の復讐	(外一話)
(第廿三篇)	烏王子	(外一話)
(第廿四篇)	仔鹿	(外一話)
(第廿五篇)	黃金の鷄	(外一話)
(第廿六篇)	黃金の獅子	(外一話)
(第廿七篇)	岩見重太郎	(外一話)
(第廿八篇)	姉の行方	(外一話)
(第廿九篇)	安宅の關	(外一話)
(第卅篇)	巨人退治	(外一話)
(第卅一篇)	梅若丸	(外一話)
(第卅二篇)	双子武士	(外一話)
(第卅三篇)	白鳩王女	(外一話)
(第卅四篇)	一休和尚	(外一話)
(第卅五篇)	山中鹿之助	(外一話)
(第卅六篇)	不思儀の臼	(外一話)
(第卅七篇)	大森彥七	(外一話)

東京日本橋通四丁目　●振替貯金一六一七

謹奉賀新年候

お正月の必要品！

品は確かにして價の廉きが三越の特長！

お正月の必要品を始め、東京最新流行の呉服太物、洋服諸雜貨類を何くれとなく陳列販賣仕居候間、親しく御來店の上御通覽被成下度奉希上候

在地方の御方は地方注文案内書(御申込次第進呈可仕候)により御注文被下度願上候

東京日本橋區駿河町

三越呉服店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

生涯の利益になる記事を満載す

婦人世界

正月一日發刊五巻第一號　價一冊拾五錢　郵税一錢五厘一年分郵税共一圓二十五錢

△何人も必要な衛生知識　村井弦齋
△老父の車の後押をして働く孝行女教師の話
△何故に彼女を次男の嫁に選みしか　鳩山春子
▼十二一重を着て洋行　下田歌子
▼良人の入獄より得たる教訓　後藤和子　遞相夫人
▼結婚の時伊藤公より受けた教訓　大倉久美子
△母乳と牛乳と交ぜて飲ませる注意　加藤博士
△百九歳の長壽を保つ……中野きん子
△女學校卒業して新家庭を造る　御堀松代
▼良人を助けて數百萬の財産となる……仲かぎ子
▼一代に七十萬圓の財産を造る　松本蔦子
▼熊本籠城中に女子を産む　興倉鶴子
△二宮尊徳先生に九年間仕へし老女を訪ふ記
△將校夫人として御用商人の賄賂を斥けし話
▲新年附録　明治婦人雙六

東京京橋南紺屋町　實業之日本社　(電話新八四七四)(振替口座六二三)

金銀盃類

貴金屬寶石美術品袋物一切何品に依らず迅速と廉價を旨とし誠實に新調又は改作の御用相勤め可申候間何卒一層の御引立を以て多少に不拘御下命被下度奉願上候

宮内省御用達　玉寶堂　電話下谷 特九六五番 一二四四番

新装を凝らしてあたり眩ゆき姉妹雜誌の美觀

女學世界

一月元日發行五巻第壹號　正價廿錢　郵税前共六十錢◉郵税共金貳圓三拾錢！

新年大附錄

口繪◎西洋草花(美麗六色刷)◎春の別莊(美麗原色版)◎新粧の佳人◎名家の令嬢等！
新案婦人風俗双六　武内桂舟畫伯筆　極彩色艶麗鮮美
◎九重の奧(兩陛下の御平生並びに宮中御賄の次第)
◎皇后陛下新年の御すさび(宮中御かるた御遊び事)
◎上流社會の松の内(格式を貴ぶ大家庭お正月の慣例)
▽貴婦人の世間話…(日々變り行く世間に處する法)
◎歐洲貴婦人の社交談(交際社會の大山公夫人の實話)
◎名流婦人の生活談(江湖知名夫人の趣味嗜好)
▽新時代の教育を受けたる奧様の面影……
◎大富豪の家庭(小間使の目に映じたる大富豪の生活)
◎榮ゆる權門(華族、富豪の榮えある家庭生活を描く)
▽各地正月物語▽贅澤なる臺所話▽新婚の正月
◎都下各女學校の校風くらべ

少女世界

一月元旦發行五巻第壹號　正價拾錢　郵税一錢　◎四冊四十二錢

新年大附錄　女學校すごろく　嚴谷小波案　岡野榮畫　榊原蕉園畫

◎口繪はつ着(彩色版)梶田半古筆　仲の姉妹(彩色版)中澤弘光筆
◉新年の歌　田山花袋
△私の感心した話　下田教授
△英譯少女の歌　鹽谷榮
△お伽小説怪牡丹　嚴谷小波
△小女小説お靜　三宅花圃
▼雪ちゃんの犬…
▼活動寫眞探偵鞄
▼寫眞挿みの編方
▼少女訓話……

(東京日本橋區本町)　博文館發行　(振替口座二四〇番)

美！美！美！

眞に理想的美顔料として目下世界の貴婦人令嬢間に盛んに賞用せられつゝある佛國シモン會社製美顔用

シモンクレーム

は必ず色を白くしきめを細かに艶を出し而かも顔や手足のあれし時、髭剃りし後、ひゞ霜やけ等に對して他に卓越せる無比の美顔劑なり

日本代理店　横濱市七十番　エー・ハイム商會

(各地化粧品及小間物店にあり)

最上醤油

品質優等ニシテ調理ニ適ス

釀造元　千葉縣銚子町　濱口吉兵衛

發賣元　日本橋區小網町三丁目廿七番地　濱口吉右衛門

最上醤油之元祖

上

宮内省御用達

開業貳百六拾五年

釀造元　下總銚子町　濱口合名會社

振替貯金口座五〇貳壹番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

岩佐病院 日本橋區蠣殻町二丁目廿三番地（電話浪花六七九番）

診察時間 自午前九時至正十二時

内科婦人科　院主　岩佐純
内科　院長（ドクトル）　岩佐新
外科　醫學士　山村正雄
産科婦人科　醫學士　西村漸
腦病脊髓病　醫學博士　土田卯三郎

婦人科産科木村病院
京橋卅間堀一丁目角（電話新橋二六七〇番）
○院長 ドクトル 木村順吉

ムスク香水

麝香獸印（大瓶 壹圓／中瓶 六十五錢／小瓶 二十五錢）

芳香の永く保つ點にて高評也

（注意）一 近來類似品を販賣する者あれば御買求の節は右瓶の形狀及び二頭の麝香獸に御注意を乞ふ市内賣藥小間物化粧品店に於て販賣致し居り候

東京日本橋本石町四　松澤常吉

腦神經精神病科
病室清新　診療確實
東京龜戸町電話浪花二五五二
加命堂腦病院

斜視（本院）眼科 一般 特に成形 手術
牛込市谷田町三の廿新見附外 畑眼科院 電番一八六六 入院隨時
（分院）芝區田町札の辻電車停留場前

謹而クラブ洗粉愛用者各位の御幸福を奉祈ル

クラブ洗粉本鋪
帝國化粧品倶樂部

にきびを有效化粧液とる チプリ
到る所販賣にし升
廿グラム入 二十五錢
東京本石町 松澤常吉

小兒病一般
京橋區南鍋町風月支店斜向電新四八八壹
宅診午後　醫學士　福田謙之

産科婦人科小兒科　女醫　鷲山彌生
診察時間　院長　毎日午前八時より
醫員　毎日午後三時より
内科部長　醫學士　武智基造
診察時間　火木土午後壹時より
病室及産室の設けあり入院隨時
東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地
東京至誠病院 電話番二二五

松澤ホーサン石鹸
色白く艶をだす（大形 廿錢／小形 十錢／新小角 十錢）
●近來類似品あれば御買求の節は上部の商標に御注意を乞ふ○市内賣藥小間物化粧品店にあり
東京本石町四　松澤常吉

◎産科婦人科
明船町十九虎門外之、
電話新橋三三二四番
櫻井克巳

内科一般
東京神田美土代町三丁目十七番地
午前宅診 午後往診
電話本局貳千九百七十番
板垣亭

院長 醫學博士 榊順次郎　婦人科産科 毎日午前診察
副 醫學士 久保德太郎　婦人科的外科 外國留學中
副 醫學士 田代謙二　婦人生殖器病 泌尿器病及内科一般 火木土午後診察
婦人科産科榊病院
●施診火木土午後一時至二時
麹町三番町三三（電話番町三九五）

小兒病診療 往診午後 宅診午前
淺草區新福井町二（瓦町電車停留場際）
醫學士　内田愼太郎（電話下谷七一八）

内科専門
神田區駿河臺 電本一六六九
杏雲堂醫院
院長醫學博士　佐々木政吉

AIKOKU FUJIN
(THE PATRIOTIC LADIES).

A Fortnightly Home Journal.
Circulates in all parts of Japan; Official Organ of the Japan Ladies Patriotic Society.

Head Office: Iida Machi, Kojimachi-ku, Tokyo.

All communications respecting European and American Advertisements should be addressed to
THE FAR EASTERN ADVERTISING AGENCY
(Toyo Kokoku Toritsugi Kaisha),
38, Naka Machi, Kobe, Japan.
(or London Office: 57, Craven House, Kingsway, W.C.)

明治四十三年一月一日發行（毎月五日廿日二回）
（定價金三錢五厘一ヶ月七錢郵税不要）
廣告料一行金六拾錢）
編輯人 永持德一　發行兼印刷人 小澤俊夫
發行所 東京麹町區飯田町 愛國婦人發行所
印刷所 東京市牛込區榎町 日清印刷株式會社

愛國婦人廣告取扱
神田三河町一ノ一九 博報堂
京橋宗十郎町一七 正路喜社
日本橋蛎殻町三ノ十一 大興社
京橋區南紺屋町一 一星社
神田須田町廿七 金蘭社
京橋區 廣告社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

附錄 愛國婦人會記事

東京支部定期救護金贈與金額及人員郡區別表

四十二年度定期救護金贈與金額

郡區別	救護金額	人員
麹町區	一五、〇〇〇	三人
神田區	二〇四、〇〇〇	貳拾貳人
日本橋區	七三、〇〇〇	八人
京橋區	一五五、〇〇〇	拾七人
芝區	六五、〇〇〇	拾人
赤坂區	三七、〇〇〇	四人
麻布區	四〇、〇〇〇	八人
四谷區	一一〇、〇〇〇	九人
牛込區	一二四、〇〇〇	拾壹人
小石川區	七五、〇〇〇	拾人
本郷區	一九〇、〇〇〇	貳拾五人
下谷區	一三五、〇〇〇	拾人
淺草區	四〇一、〇〇〇	参拾四人
本所區	二一六、〇〇〇	貳拾四人
深川區	一四八、〇〇〇	拾四人
荏原郡	一六八、〇〇〇	貳拾六人
豐多摩郡	二六五、〇〇〇	四拾貳人
北豐島郡	一九〇、〇〇〇	貳拾六人
南足立郡	一〇〇、〇〇〇	拾壹人
南葛飾郡	六五、〇〇〇	六人
西多摩郡	二八一、〇〇〇	五拾九人
南多摩郡	二三三、〇〇〇	参拾壹人
北多摩郡	一七一、〇〇〇	参拾壹人
小笠原島	三〇、〇〇〇	壹人
	三、四三六、〇〇〇	四百三拾九人

内 本部より配當額貳千九百参拾貳圓也
支部より增加配當額四百九拾四圓也

韓國本部木浦委員部 第一回總會狀況

愛國婦人會木浦委員部の總會狀況を報せんに明治四十二年十月一日午後二時當委員部は木浦開港十二週年の紀念日をトし第一回總會を開催す此日天氣晴朗一點の曇りなく最も嚴肅に最も盛大に擧行することを得たり以下狀況を記述すべし當港唯一の大建物たる劇場壽座を式場に充て同座入口には一大綠門を作り場の內外には萬國々旗を吊して裝飾を施し場の正面に壇を設け總裁宮妃殿下の御眞影を奉置し來賓、會員及委員の席を區別し午後二時花火の合圖と共に一同式場に整列す委員部長は靜かに席を離れて總裁宮妃殿下御眞影の覆を撤す此時會集一同敬禮君が代の奏樂會衆之に和す次に委員部長は式壇に進み左の式辭を朗讀せり

愛國婦人會木浦委員部は會員三百八十餘人の多きに達し茲に其の第一回總會を開き隆盛を極む眞に歡喜措く能はざるなり

日韓兩國の姉妹は互に親睦を結び益奮勵躬行して忠君奉公の誠を盡し兩國の幸福を增進せんことを努む

聊か蕪辭を述べて本日の式辭と爲す

明治四十二年十月一日

愛國婦人會木浦委員部長松本嶺子

次に事務員より會務狀況及會計報告をなせり

會務狀況

我委員部の創設は明治三十七年時の領事若松兎三郎氏を顧問に同夫人りう子氏を委員部長に囑託し爾來同委員部長は專ら本部の趣旨普及に盡瘁せらるゝこと極めて熱心なりき清水たか子、福田恒子、高根はる子の諸氏又大に本會の趣旨を贊し熱心に應援せらるゝありて會務漸く緒につき明治四十年十月末には會員壹百餘名を數ふるに至れり當委員部の基礎茲に完成す、之れ全く前委員長若松夫人の熱心と清水たか子、福田恒子、高根はる子諸氏の應援によるものとす

四十年十月若松氏は元山理事廳へ轉任せられ同夫人又去られ委員部長缺員となる四十年十月より中大路正雄氏顧問として委員部の爲め盡瘁せらるゝに至り會員清水たか子氏は若松委員部長の後を享け明治四十一年七月に至るまで殆んど一ヶ年間煩雜なる事務を意とせず福田恒子高根はる子の諸氏と協力して事務管理の勞を採り會務擴張に盡瘁せらる其功績實に與大にして當委員部は永世深く感謝する所なり

四十一年七月清水たか子氏より當委員部の事務を理事廳に引繼ぎ田所恒行、大內發生、飯塚照雄の諸氏交々代て事務を處理せらるゝありて昨年十一月中大路顧問は茶話會を開催し會務擴張を計られたり此時百二十餘名の新加入者を迎へ當委員部は一躍して二百四十餘名の會員を數ふるに至る更に進んで郡部に本會の主趣を普及し數十名の加入者を迎ふることを得たり

此好成績を擧げたるは有志諸氏の熱心なる同情に外ならず茲に於て當委員部は多年本會の爲めに盡瘁せられたる福田恒子、清水たか子、高根はる子、下條ひで子、市川榮子、瀧尾榮子、吉村きし子、木村みつ子、谷村たま子、松村みね子、村上さか子、井出せん子、平岡光子、大河原琴子、伴たみ子の諸氏を推薦して當委員部の委員を囑託したり斯して四十一年は終りぬ四十二年四月中大路氏は清津理事廳へ轉任せられ松本重敏氏當委員部の顧問として令夫人嶺子氏委員部長として就任せらるゝに至り遂に今回の總會を開催する機運に逢遇したる次第なり總會開催に付ては當地各協贊委員諸氏の熱心なる應援に依り意想外の好成績を擧ぐることを得たるは清水たか子、福田恒子、市川榮子、下條ひで子、木村みつ子、古屋さと子、松本たか子の諸夫人の熱心に對し感謝し且つ滿足する次第なり

尙九月三十日朝の調査によれば當委員部の總會員數は三百八十二名にして其內譯特別一時出金十三名特別年賦會員五十三名通常一時出金三十一名通常年賦會員二百八十五名なりとす當委員部管內の邦人女子の人口は二千七百五十七名あり加入者の大數は邦人女子にして百人に付十人強に相當する次第

今回總會開催に付韓國婦人拾數名の加入者ありしは當委員部の滿足する所にして爾今日韓婦人の間に本會の趣旨を普及せば前途の事業尙大に擴張の餘地ありて諸氏の協贊により本會の目的を達せざるべからず

韓國本部大橋主幹は左の祝詞代讀をなせり

愛國婦人會木浦委員部會員諸氏は夙に本會の趣旨を贊襄し會員日々增加し茲に第一回總會を開かるゝは欣慶の至りなり

今や本會の事業や益々擴張せられ現に韓國各地に於ても益々發展の氣運を呈せむとす是偏に會員諸氏の熱誠なる同情に因らずんばあらず希くは自今一層同心協力會務の進張に努め我友邦の姉妹と俱に親睦融和以て兩國の幸福を增進せんことを

明治四十二年十月一日

愛國婦人會韓國本部長代理

副長伯爵夫人　兒玉澤子

市川信晤氏は左の祝電を朗讀せり

貴委員部總會を祝す

愛國婦人會副會長

公爵夫人　一條悅子

貴部總會を祝し將來の發展を祈る

愛國婦人會韓國本部

御盛會を祝す

愛國婦人會群山委員部長

天野ぐん子

次に協贊委員總代として左の祝詞朗讀ありたり

畏くも天皇皇后兩陛下皇太子殿下に於かせ玉ふても本會の趣旨を愛でさせ給ひて閑院宮妃殿下總裁に各宮妃殿下名譽會員に渡らせ玉ふ斯の愛國婦人會木浦委員部は本日其の第一次總會を擧げらる君の爲め國の爲め死を厭はぬ我帝國軍人の勞苦を思ふにつけ我等婦人とて如何て之を傍觀するのみにて可なるべき左れば本會に籍を置きつるも全く大和婦人の本分とよく思へとの御令旨に酬ひまつるにこそ固より拙なき賤か身の只たかの足らぬぞ口惜しき時しも秋の日の澄み渡れる今日宜き日に斯くも目出度き盛　の執り行はれぬぞ有難し愛國婦人會木浦委員部姉妹に代りて一言申侍り候

愛國婦人會木浦委員部

協贊委員總代　清水たか子

次に又來賓總代としては臨時派遣隊司令官渡邊少將の祝詞演說あり顧問松本重敏氏發聲の下に會集一同愛國婦人會の萬歲を三唱し右畢て總裁宮妃殿下の覆をなす此時一同敬禮續て閉會を宣告す此時午後三時二十分なりき夫れより式場を出て理事廳構內に於て紀念撮影をなし午後三時三十分より園遊會を開き會集一同喜々として遊ぶ園遊會を終りしは午後五時過なりき

夜七時より壽座に於て韓國本部大橋主幹の熱心なる說明の下に活動寫眞會を開催し多數の觀覽者ありて場內立錐の餘地なき盛況を呈し本會の趣旨を普及する上に於ても著大なる功績ありしことを認むこれ一に大橋主幹の熱烈なる說明に基因するものなることを特に報告する次第なり

這回の第一次總會は日本赤十字社木浦支部第一回總會と連合して擧行したる次第にして一般の盛況を呈したり殊に韓國婦

新春の御吉慶千里同風めでたく申納め候先以て各地會員の君達には益々御健勝御齡を重ねられ候事欣喜の至りに御坐候、われ等一同亦無事新年を迎へ候まゝ、御心やすう思召下され度候、さて本年を以て戰勝後平和の第六年に入ることゝ相成、過去一年間、國家各方面の經營社會百般の事業等孰れも急速なる大發展を呈するの盛況を見聞し、國家の爲大慶至極に奉存候、わが愛國婦人會も亦その間に在りて益々國民の同情を博し、目下八拾有餘萬の會員數を計上致居候、從て本會の目的たる軍人の遺族幷廢兵の救護等庶般の事業長足の進境を出現致居候。之れ大勢の然らしむる所とは云へ、全く總裁閑院宮妃殿下の難有思召を奉體して、會員諸氏が能其實行に勉められたるの結果に他ならず、何卒本年も一層の奮發勉勵を以て本會の趣旨を貫徹致度存候、先は新年の御祝詞まで、かしこ

明治四十三年一月一日

愛國婦人會

監事　男爵夫人　三井苞子
同　伯爵夫人　伊東美津子
理事　棚橋絢子
同　三輪田眞佐子
同　男爵夫人　濱尾作子
同　侯爵夫人　鍋島榮子
同　前公爵夫人　毛利安子
同　前公爵夫人　近衛貞子
同　公爵夫人　大山捨松
同　公爵夫人　一條悅子
副會長　伯爵夫人　阿部篤子
會長　子爵夫人　岡部坻子

愛國婦人會支部職員
愛國婦人會々員
御中

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人拾數名の新に加入し本總會に臨みたり全羅南道に於ける韓國婦人が我大和婦人と席を同ふして公會の席に列して日韓兩國の親睦を厚したる等凡べて好成績を擧げたる次第なり

韓國本部群山委員部 活動寫眞大會狀況

會場群山座の內外には萬國旗球燈を掲揚し入場口には旭旗を交叉し總て清淨なる裝飾を施こし場內に喫烟室茶飲所等の設備をなし觀覽席を協贊委員席委員席軍人席韓國人席及社員會員席の五種に區別し入場口並に場內の取締は天野支部長阪上副長及理事廳員之に任せり豫て期待せる事とて午後六時前後より日韓の社員會員陸續として入場開會定刻迄には既に滿場立錐の餘地もなく階上階下社員會員を以て充たされ胸間の社員章會員章は燈火に映じて一種の美觀を呈せり七時半開會天野支部長開會の辭並に赤十字社事業の概要を述べ終て大橋主幹を紹介せらる次に大橋主幹登壇一應挨拶の上赤十字社愛國婦人會の趣旨及擴張に對する希望を述べ退壇先づ赤十字事業に因みある幻燈數十種を示し夫れより活動寫眞に移る何れも嶄新珍奇ならざるはなし就中韓皇陛下の西韓御巡幸、統監邸御訪問、韓太子殿下の御近狀等は最觀覽者特に韓人の注意を引きたるものゝ如く其他日露大海戰回向院大角力等何れも大橋主幹の熱心なる說明に依り終始觀覽者に無限の快感を與へ十時半無事閉會入場者無慮千餘名近來未曾有の盛況を呈したり

京都支部竹野郡幹事部 第三回總會

京都支部竹野郡幹事部は去る十一月十三十四、十五の三日間左の式次に依り三ケ所に於て同郡幹事部第三回總會を開催せり即ち

擧式順序左の如し

一御令旨捧讀　芦谷幹事部長
一式辭　同
一支部長祝辭　芦谷顧問代讀
一事務報告　事務員朗讀
一紀念品披露（卅七八年戰役の功に依り下賜銀盃）
一來賓祝詞會員總代祝詞（會長の祝電朗讀）
一謝狀贈與　芦谷幹事部長ゟ傳達
一唱歌（金剛石）
一閉會

右の順序を以て十一月十三日は網野小學校に於て開催當日來會せし會員百五十餘名同月十四日は濟谷小學校に於て開催當日來會せし會員四十餘名同月十五日は竹野小學校に於て開催當日來會せし會員約五十名にして三日間共天氣稀なる快晴に際し非常の盛會を極め式後來會者一般へ折詰を饗應し又席上蓄音器の餘興を爲し特に竹野部內開催當日は海濱に園遊會場を設く等何れも和氣靄々の裡に散會せしが今回の會同は日本赤十字社同郡委員部社員總會をも合せ行ひたる爲め兩團體事業の狀況相互能く疎通紹介せられ極めて好都合なり

以上の狀況なるを以て同郡幹事部長及び顧問一致して本會擴張上に不斷注意せる熱心家なれば同郡の會務發展會員の增加は日を期して俟つべきなり

右及報告候也

明治四十二年十二月二日

愛國婦人會京都支部長大森齡子

京都支部天田郡幹事部 第六回總會狀況

當京都支部附屬天田郡幹事部は去る十一月廿二日午前十一時第六回總會を同郡福知山町常盤館に於て開催せしに付當支部よりは本職及幹事鈴木千代子主事大鐘暢の三名參列本會よりは富樫眞喜子氏出張せられたり其次第左の如し

式事

第一鈴　諸員着席
第二鈴　支部長臨席
一君ケ代合唱
二開會の辭（幹事荒川松子）
三明治卅七八年戰役に關する皇后陛下の御令旨捧讀（荒川幹事顧問）
四會長祝電披露（幹事小川琉子）
五支部長告辭
六會務報告（書類代用）
七有功章授與（大森支部長）
八軍人遺族廢兵四十二年度定期救護金交付（同人）
九本會長謝狀交付（同人）
十荒川顧問祝辭
十一來賓祝辭（大森顧問）
十二答辭（幹事村上茂子）
十三閉會の辭（幹事荒川松子）

右式了て富樫眞喜子氏は本會事務の狀況及會務發展の必要に就き約一時間餘の講演あり引續き一同に午餐を饗應し午後二時より餘興（手踊）に移り同四時全く終了閉會せり當日は朝來天氣快晴にして來會者多く遺族、癈兵を合せ百五名會員六百十名其他來賓、職員等六十五名合計五百八十名に達し中々の盛會を極めたり當日三等有功章を授與せられたる幹事吉田とう子同片岡八重子同高木春枝子の三氏にして是等は大ひに他の奬勵となり隨て向來本郡の會員は益々增加發展の兆あるを認めたり

秋田支部南秋田郡 幹事部第一回總會

十一月六日第一回總會を五城目町尋常高等小學校內に開く支部よりは顧問森正隆氏支部長森うん子氏及評議員西山鈴子財部梅子、樋口敏子、長谷川みと子協議員高橋千代子小野崎ふで子事務員齋藤和節石黒松太郎竹村已代次の諸氏同伴參列し來賓としては秋田聯隊區司令官少佐大瀧幹正氏雄勝郡幹事部長深谷きの子氏秋田魁新聞記者南秋田郡各町村長面潟村千田平三郎氏雄勝郡幹事若松能惠子氏參列せしが來會せる者遺族癈兵會員來賓を合せ五百有余名の多きに至る午前十一時開會君が代奏歌に次き三神幹事部顧問　皇后陛下の令旨奉讀一同最敬禮森支部長告辭三神幹事部長答辭森顧問の演說、事務員小笹雄助氏の會務報告來賓並に會員總代の祝辭等あり夫より森支部長は本會功勞者竹內みな子外四十四名に有功章及ひ賞品感謝狀を授與し次に遺族癈兵百五十八名に見舞金壹圓宛を贈與し又た三神幹事部長よりは南秋田郡遺族癈兵一般に木綿手織反物壹反宛を贈與し之にて式全く終了午後より同校內別室にて折詰を饗し席上大瀧少佐が本會の旨趣及婦人か出征軍人の後援恤兵樹籍に盡瘁せられしは戰地志氣振與に偉大の効力ありし上を懇篤に演說せられ會衆一般大に感動し和氣靄々の中に散會せるは午後三時にして同地方未曾有の盛會なりき尙は行賞人名は左の通

本部行賞

一等有功章　土崎港町　竹內みな子
二等有功章　金足村　奈良せい子
仝　船越村　西村市子
仝　五城目町　渡邊よし子
仝　馬場目村　兒玉ちよの子
仝　富津內村　伊藤ひて子
三等有功章　幹事部顧問　三神正健
仝　幹事部長　三神はつ子
仝　馬場目村　兒玉すか子
仝　馬川村　渡邊きみ子
仝　面潟村　佐藤きよ子
仝　大川村　木村なを子
仝　五城目町　北島しさ子
仝　五城目町　宮田いき子
仝　潟西村　佐藤いわ子
仝　旭川村　荻原きの子
仝　馬川村　館岡ちや子
仝　五里合村　佐々木りさ子
仝　上井河村　高橋とく子
仝　仝　伊藤みえ子
仝　上新城村　大淵しの子
仝　金足村　三浦たか子
仝　男鹿中村　目黒りな子
謝狀及木杯　船越町　太田政光
仝　上新城村　佐藤源次郎
仝　五城目町　矢田鐵三郎
仝　拂戸村　小野貞治
仝　船越町　天野龜五郎

支部行賞

謝狀及銀盃　面潟村　千田勇子
仝　上新城村　委員區
仝　船越町　委員區
謝狀及木杯　五城目町　委員區
謝狀及銀盃　土崎港町　宇佐美さた子
謝狀及服紗　幹事部　小笹雄助
仝　仝　柴田米藏
仝　仝　横山淺五郎
仝　五城目町　渡邊德太郎
仝　仝　渡邊千代助
仝　仝　伊藤憲三郎
仝　下新城村　渡邊義一
謝狀及服紗　廣山田村　三井いよ子
仝　土崎港町　櫻田まさ子
仝　仝　村山さと子
仝　拂戸村　野口はつ子
仝　　小國きつ子

以上

熊本支部阿蘇郡久木野長陽兩村合併總會

阿蘇郡久木野、長陽兩村は先般來會務の發展を圖り會費の整理會員の誘導に整理實債を擧げたるを以て去る四日午後一時より久木野村河陰尋常高等小學校に於て久木野、長陽二ヶ村合併總會を開會したるか熊本支部よりは主事河內山熊太郎、事務員島田實囑託講師南木大憲の三氏阿蘇郡幹事部よりは顧問中西郡長委員宮川郡書記の二氏出席し久木野村幹事長野芳子長陽村幹事野田まよ子、久木野村委員今村正直、長陽村野田正道、役場書記荒木元房、坂井弟一郎の諸氏又來賓として高森町幹事山村ゆい子外高森町會員藤野ひさ子、津留つや子、久木野村々會議員高木愼之、郡會議員野田貞一、役場書記佐藤重信、有志家長野一誠、佐藤常信、野田與四郎、光永雪三、野田五郎衛、長野信夫、荒牧繁、甲斐求、今村平次、大塚西五郎、長野眞一、河陰校長鶴田壽八、敎師後藤豐、有働元二、女敎師下村せつ子、荒木つえ子、長陽村有志家宮川宗保下田兼平、下田龜熊、下田常三郎、安岡齊、の諸氏以下兩村會員、遺族兵癈諸氏四百余名に逢し場內殆んど立錐の餘地なかりし午後一時開會を報し先つ委員今村村長一同を代表して開會の辭を述べ　君が代の奏樂あり尋て又三十七八年戰役の際　皇后陛下より本會に賜はりたる御令旨を拜讀し河內山主事は支部長の祝辭を代讀し中西顧問は一場の演說をなし引續き河內山主事は會務上及支部の遺族癈兵に對する救護其他諸般事業の現況に就き詳細なる報告をなし次に南木大憲師は婦人會、主趣より三十七八年戰役に於ける婦人會員の活動と遺族癈兵の事に說及ぼして大に感動を與へ會員下村女敎師は會員一同に代り答辭を述へ終りて野田幹事は一場の挨拶と共に閉會の旨を告ぐ之れより茶菓の饗應あり當日は兩天にも拘らす會員は全部出席し其他老若男女當日の盛會を見んとて集り來る者多く近比稀なる盛會なりし因に本兩村は婦人數三千二百二十二人に對し二百五人の會員となり婦人百人に對し六人余の多きに及ひ今標準數たる婦人百人に付四人の剰合より算すれば總會員七十七人を超過し誠に盛況にして兩村幹事、委員、其他有志家諸氏の盡力思ふべし尙は右等諸氏は今後一層益奮て會員の誘導並會費整理に盡力せんと意氣込み居れり又殊に感すべきは長陽村會員谷崎えみ子にして同氏は齡六十を超へ極めて赤貧なるを以て親類に寄食し其扶助に仰ぎつゝある身でありながら夙に婦人會の主趣を贊成し如何にもして會員となり國家萬分の一を盡さんことを欲し女心の熱心より每日山に出て山稼をなし之を贈き得たる金を以て一時金七圓を出金して甲終身會員となり當日通常會員微章に終身會員の章たる紅組の總を付して出席したるは大に一同に感動を與へたり中西顧問河內山主事は大に之を喜ひ特に同氏を招て懇に其熱心なる心懸を賞せられたり同氏の如きは實に他會員の模範とするに足るものとす又總會開會には專ら盡力せしは長野一誠幹事野田まよ子仝長野芳子、委員今村正直、仝野田正道長野たけ子、倉原さえ子役場書記荒元房有志家高月正坂井一郎弟の諸氏なり

富山支部富山市幹事部 談話會

同幹事部に於ては左記日割箇所に於て定期救護金贈與式に併せて會員談話會を開催せしか支部事務員草野ちゑ子の會旨普及演說あり終に宇佐美支部長には親しく救護令贈與狀を各被救護者に交付し後ち會員に對し一場の挨拶等ありて閉會せしか孰しも多數聽衆ありて頗る盛會なりき

十一月十日午後一時より　東本願寺別院
仝　十三日仝　梅津町永福寺
仝　十五日仝　愛宕町乘光寺
仝　十七日仝　餌指町通坊
仝　十八日午後五時ゟ　西中野町福恩寺
仝　十九日午後一時ゟ　西本願寺別院
仝　三十一日仝　稻荷町善久寺

富山市內被救護者數左の如し

丁之部　三十六名
丙之部　二十七名

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN